

2020年度

巖
鷲
寮
誌

佐藤・新渡戸記念寮

創立 93 周年

巖鷺寮誌

2020 年度

一般財団法人巖鷺寮

巖鷺寮一心会

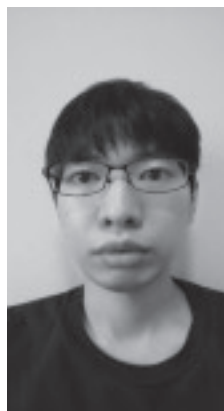
Be social, be gentleman.

(解説) 巖鷲寮の創立以来のモットー。後半部分は札幌農学校のウイリアム・スミス・クラークが1期生に与えた言葉を佐藤昌介が伝えたもので、学寮(恵迪寮)のモットーと共通している。この後半部分は“be gentlemen”でなければならないという指摘もある。

これまでの日常への感謝

2020 年度前期

寮長 須藤 大智



2020 年前期寮長を務めました 2 号室の須藤大智と申します。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により様々なことが例年とは大きく異なりました。寮での行事としては、入寮式の中止や寮祭の規模を縮小しての開催など、不便を強いられる場面が多くありました。特に、新入寮生は慣れない生活による苦労もある中で、大変残念ではありましたが、来年以降での開催を楽しみにしていただければと思います。

また、学校生活も、オンライン授業やサークル活動の禁止、制限など例年とは大きく変わった 1 年となりました。私自身も、研究室のゼミがオンラインで行われたり、試料採取の出張に行けなくなったりしたために、卒業研究に大きな影響がありました。また、バイト先の経営状況が悪化したためにバイトを辞めざるを得なくなった人もいました。全国的にも、学費をまかなえなくなったために大学に通うのが困難になる人が多くいる、といったニュースもありました。

このように、新型コロナウイルスは私たちの生活に大きな影響を与えましたが、一方で今まであまり導入されてこなかったテレワークの推進などや、今まで送ることができていた日常への感謝やすばらしさを感じる貴重な機会になったのではないかと思います。新型コロナウイルス感染症が落ち着きを見せ今までの日常が戻った際には、当たり前の日々に以前よりは感謝をして毎日を過ごすことができるのではないかと思います。

最後になりましたが、寮誌を作成するにあたってご協力いただいた皆様、さらには巖鷲寮に携わり支えてくださっているすべての皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。

コロナ禍での寮生活

一般財団法人巖鷲寮 理事長 昆 泰寛



佐藤、新渡戸記念寮（巖鷲寮）を管理運営する財団法人「巖鷲寮」は昭和2年（1927年）に設立され、現在の建物は4代目となります。当初は、札幌市およびその近郊の大学に籍を置く旧南部藩（岩手県、青森県南部地方、秋田県鹿角地方）出身学生に対する郷土寮として始まりました。しかし、設立当初から地方閉鎖的な雰囲気はなく、指定地域外の寮生も多く在籍していたと聞きます。また、設立の経緯から最初は北大生に限った入寮形式であったため、「北大巖鷲寮」とかんむりがつけられておりましたが、現在では北大生に限らず札幌圏内に通う大学生を対象としています。桑園地区という都心へのアクセスも便利な立地条件は、北大のみならず近郊の大学への通学にも利便性を与えてくれます。また、女性も入寮可能である点は、3代目までの寮に暮らした諸氏には信じられない改革と映るのではないのでしょうか。

さて、本年度はコロナに始まりコロナに終わる、寮の歴史・存続にとって忘れられない年となりました。一般的には中国武漢市から始まったとされるCOVID-19は、2020年2月の雪まつり直後から札幌で第1波がみられ、瞬く間に全国に広がり、現在の惨状が続いています。そんな最中で、2020年2月15日には 卒寮式を執り行い、石井 亨くんと木村佳幹くん

と山口健介くんが旅立っていきました。北海道の緊急事態宣言が発令されたのが2月28日であったことを思うと、まさにギリギリのタイミングでの挙行でした。北海道大学では、入学試験（後期日程）が中止になり、センター試験のみで合格者を決定するという異例の措置が取られました。4月以降は、流行語大賞ともなった「3密」が叫ばれるようになり、4月16日には換気（密閉）、距離（密集）、会話（密接）に気を付ける新しい生活様式なる対応を基とした、日本政府の緊急事態宣言が出されました。これを受けて、寮では「佐藤新渡戸記念寮 COVID-19 対応マニュアル」を発行し、体調管理、消毒、マスク着用、換気、3密を避ける、旅行の自粛をお願いしてきました。

4月11日に予定していた新入寮生歓迎会は中止となり、清野佑弥くん、白木達也くん、山下晴海さんの晴れ姿は11月23日の寮祭式典までお預けとなりました。せっかくの大学生活の始まりは、ガイダンス・入学式の中止、オンラインのみの授業という未だかつてない経験の連続でしたでしょう。見方を変えてみた場合、COVID-19は人類の生存にとって脅威ではあるけど、オンライン授業という新しい授業形態を生み出した張本人とも言えます。寮を含めた多くの家庭・施設がWiFi・インターネットを導入し、ある意味で快適な新生活様式が取り入れられる結果を生み出しました。学生が快適なオンライン授業を寮内で受講できる環境を整えるため、インターネット状況をアンケート調査し、WiFiポイントの増設ならびに各個室の有線化を実現しました。オンライン授業について、私の部局では数回に渡って学生アンケートをとってきました。夏のアンケートでは、オンラインと対面をバランスよく配置した授業が好まれていましたが、つい先日行ったアンケートではオンライン派が圧倒し、対面の声は聞こえなくなりました。オンライン授業の大きな利点は、動画記録を使った復習が可能なことで、試験が近づくと利用回数が増え、実際の成績も例年より高くなっている傾向が伺えます。寮生に聞いていませんが、おそらく同様のことが言えるのではないのでしょうか。

本寮は、Be social「人と交われ」、Be gentleman「紳士たれ」を建寮の精神とし、それは寮の定款「秩序ある共同生活を通じて、健康の増進と精神の陶冶を図る」に通じるものであります。この未曾有のコロナ禍にて、Be social with distance「人を交わるときは距離をとって」、Be gentleman with disinfection「紳士としての行動とは清潔な身なりと手指の消毒」に心する必要があるでしょう。マスクと手洗いは一定の予防効果が確認されています。私たちが日頃できることはやって、万全の体勢で元気に生活しましょう。今年も清水孝文くん、口町和香さん、菅原 空さん、新谷美咲さん、中村嘉克くん、永井杜明くんが卒寮です。清々しいコロナ晴れの良き日を祈念します。☞

(写真の背景は岩木山)



2020 年度巖鷲寮誌

目 次

巻頭言 これまでの日常への感謝 …… 2020 年度前期寮長 須藤 大智 …… i

コロナ禍での寮生活 …… 理事長 昆 泰寛 …… ii

〈特別寄稿〉

寮ゆかりの盛岡小景 …… 藤尾 善一 …… 1

平成の戊申戦争（北海道新幹線札幌延伸秘話） …… 佐藤 馨一 …… 9

「大正泥流九十年」によせて

泥流地帯の復興にかけた農業技師 猪狩源三の生涯 …… 猪狩 昌和 …… 14

COVID-19 備忘録 …… 長山 由起夫 …… 22

寮の思い出と新型コロナ対策のこれから …… 豊田 健一 …… 28

新種セタナキンボウゲ発見の記 …… 本多 丘人 …… 33

アンティーク紀行 …… 横澤 宏一 …… 41

〈エッセイ広場〉

我が家のワイドテレビジョン …… 田村 浩志 …… 48

〈寮生のページ〉

寮生近況

清水 孝文 …… 55 須藤 大智 …… 56

桔梗原 遙大 …… 57 中村 嘉克 …… 59

清野 佑弥 …… 60 久語 佑希 …… 61

白木 達也 …… 63 米田 啓祐 …… 64

熊谷 太司 …… 65 永井 杜明 …… 66

安齋 暢仁 …… 68 山下 晴海 …… 69

口町 和香 …… 71 佐藤 亜有 …… 72

菅原 空 …… 73 新谷 美咲 …… 75

〈一心会のページ〉

「巖鷲寮一心会とは」他 77

〈法人のページ〉

2019 年度事業報告書 81

資料 1 : 2019 年度損益計算書 85

資料 2 : 一般財団法人巖鷲寮定款 86

資料 3 : 一般財団法人巖鷲寮規則 93

2020 年度一般財団法人巖鷲寮役員名簿 95

寮日誌 96

2020 年度寮生名簿 97

編集後記 98



表題題字：佐藤 昌介（男爵、日本初の農学博士、北大初代総長）

カット：口町 和香

寮ゆかりの盛岡小景

藤尾 善一

盛岡駅から東方に200mほど通りを行くと、「北上川」に架かるムーンホワイト色の鉄骨のアーチとトラスからなる「開運橋」がある。そこから眺める「岩手山」は春夏秋冬、それぞれに美しい。銀雪を纏い朝日に輝く厳寒の英姿はなお際立って美しい。いつも歩を止めて眺め入ったり、カメラを向けたりしている人々がいる。

(写真①)

石川啄木の望郷の歌にも詠まれている、県民のシンボルともいふべき「岩手山」は標高2038m。別名、「巖鷲山」。大正15年、佐藤昌介総長を札幌に訪ねた田中館愛橋博士が建設中の寮に名付けた「巖鷲寮」はその山に因む。若き日、ともに盛岡の藩校作人館に学んだ二人が仰いで英気を養った山の名がその由来とされる。

その「開運橋」であるが、今や「二度泣き橋」という伝説が巷間

に流布されている。ときは凍れる冬場、盛岡への単身赴任の転勤者が、これからの生活を思い、その橋を渡りながら涙する。そして数年の後、赴任地盛岡を離れようとして、今度は離れ難く橋の袂から「岩手山」を望んで涙する。その日ばかりはその涙で北上川の水嵩も増えるのだという。盛岡市民も、故郷盛岡を離れるとき、そして絶ち難き望郷の念に駆られて帰郷したときに二度泣くのが常ということで、これまでその橋を誰ともなく「二度泣き橋」と呼んだ。



写真①：開運橋から見た岩手山



写真②：岩山展望台から見た岩手山

しかし、今や「三度泣き橋」という。かつての単身赴任者が、多くは団塊の世代かもしれない人々が、リタイアの後、盛岡を再訪し、開運橋に佇み、「岩手山」を仰ぎ、懐かしさのあまり、三度目の涙を流すというわけである。この伝説は「岩手山」があったからこそ生まれたものである。

事程左様に地元在住者だけではなく県外からの通勤族も「岩手山」のその崇高な威容と風情に心囚われ景仰の念を抱く。遠く明治にあっても同様で、故郷出身者の寮と聞き、田中館博士はこれ以上の名称はないと佐藤総長に提唱し、彼も即座に共感し受け入れたに違いない。

市街地の東側に小高い丘陵がある。「岩山」である。藩政時代は馬のための採草地で植林が禁じられていた坊主山だったそうだが、今は緑豊かな風致公園となって

いる。標高約 340m。頂上からは市街地を一望できる。真正面には岩手山の山容が広がり、天気にも恵まれれば「姫神山」、「早池峰山」、奥羽山脈も望むことができる。市民や観光客の人気スポットである。また、夜景は「日本夜景遺産」や「夜景 100 選」にも選定され親しまれている。(写真②)

そこには、高さ 11m、直径約 26mの白いおわん型の展望台が立っている。盛岡出身の鹿島建設の初代社長の鹿島精一が愛した故郷にその功績を伝えるため、鹿島の養子、守之助と孫昭一が 1962 年（昭和 37 年）に建てて、盛岡市に寄贈したものである。彼の胸像とともにある記念碑には、「ふるさとを愛しふるさとの繁栄を祈った父鹿島精一の記念にこの展望台を盛岡市に贈る」とある。2017 年（平成 29 年）には再びご厚意により改修され

たところである。(写真③)



写真③：鹿島精一像

初代巖鷲寮の建設を請け負った鹿島精一は、市内上田の生まれで旧姓は葛西。望まれて鹿島家の養子になり、鹿島組の初代社長として鉄道建設などにあつた土木建築業界の重鎮である。

寮の建設に当たっては、「未払金の実質的な棒引き」などにより大きな力となつたと伝えられている。彼の強い郷土愛あつたればこそである。故郷をこよなく愛した鹿島は今も盛岡を眼下に収め、見守るように立っている。

その展望台から遠く西南方向を眺めると市街の左上方にわずかばかりの森が見え、その間をかすかに白く輝き蛇行しながら流れ込む野流が見える。「雫石川」で

ある。その川を挟んで対岸に位置する盛岡南地区は、かつては水田が広がる都市近郊農業地帯であつたが、近年、盛岡新南都市建設が進められ、大型ショッピング施設、原敬記念館等の各種博物館、県立美術館、(独法) 県工業技術センターなどの各種研究機関、そして住宅地などの新市街地が広がっている。

そのエリアの一角に大きな瓦屋根で白壁の書院造り風の「先人記念館」がある。そこには明治期以降に活躍した盛岡ゆかりの先人 130 人が顕彰されている。(写真④)

その中の巖鷲寮ゆかりの人は新渡戸稲造博士のほか、「北海道大学の父」佐藤総長、そして「農学者・ゴールデンデリシャスの父」北大第 6 代学長島善鄰である。



写真④：先人記念館外観

佐藤総長は花巻は矢沢の生まれだが、短い期間だったが前述の藩校作人館に在学した。作人館は文学、武芸、医学の三科を教授し、幕末から明治にかけて新しい時代に対処する人材育成に取り組んだともいわれる。平民宰相と呼ばれた原敬、新渡戸博士や田中館博士もこの出身である。

その跡地は映画館通りと中央通りが交錯する地にあり、北日本銀行本店の北側に位置し、現在は「聖跡記念公園」（「日影門緑地」）となっている。（写真⑤）

「先人記念館」の佐藤昌介のコーナーには、佐藤総長名の村田治助氏にあてた昭和3年3月31日付けの「北海道帝国大学医学部規定ニ依り学士試験ニ合格シタリ仍テ之ヲ證ス」と記載された卒業証書が展示されている。

村田治助氏は昭和2年に創設されたばかりの巖鷲寮の初代委員長であった。卒業後は北大病院を経て盛岡に戻られ、紺屋町の旧奥州街道沿いに小児科医院を開業された。

私が県庁に就職した頃は、ご存命で当



写真⑤：聖跡記念公園（日影門跡地）

時最高齢ながらも、豊饒とされておられ、夏に県内の同窓生の集まりである岩手北大会、秋には寮のOB会である一心会を開催していたところ、必ずいづれかの会には毎年、出席されていた。幹事として開催案内のため、幾度か医院に伺ったこともある。晩酌はお湯で薄めた日本酒を嗜んでいると嬉しそうに話されたときの南部訛りが今も耳に残っている。医院の斜め向かいには造り酒屋の老舗「菊の司」があり、南部杜氏が岩手の米と盛岡の水で醸したそこの地酒を生涯愛飲したに違いない。生前、自分の葬儀のときは「都ぞ弥生」を歌ってほしいとおっしゃっておられたので、北大会の仲間数名と歌いご冥福をお祈りしたことであった。現在も同じ場所で村田小児科医院は開院している。

そこから、街道筋を南に少し行った交



写真⑥：新渡戸稲造像（与の字橋袂）

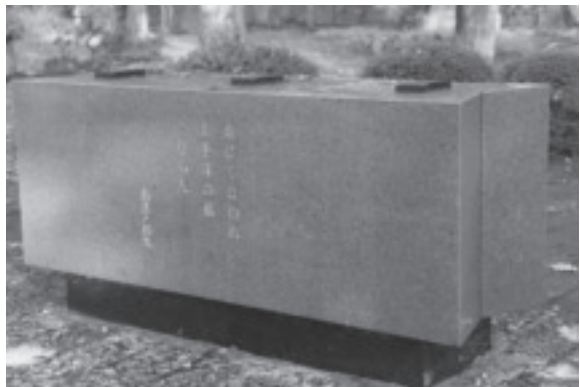
差点の、鐘楼に特徴のあるレトロな「紺屋町番屋」を右折して間もなく、「中津川」に架かる「与の字橋」がある。毎年、9月の秋祭りが終わる頃、その川には鮭が産卵のため昇ってくる。その橋の袂、市庁舎の北側緑地には新渡戸稲造博士像がある。高さ70cmほどの胸像である。彫刻家、高田博厚の作で、県内外の教え子や各界の代表が發起人となり、博士の業績を後世に伝えようと、1976年（昭和51年）に設置されたものである。著作物などでよくみられる写真や北大構内のポプラ並木傍の胸像のものとはかなり印象が違っている。向かって左側から見れば哲学者ないしは思想家の深い眼差し。しかし、右側から見ると、微笑んでい

るような柔和な表情に見えるともいわれ、世界平和や国際理解という重い使命に挑んだ博士の人間性を思わせる。（写真⑥）

そこから更に右岸沿いに市庁舎やテレビ会社の裏を通り、「中の橋」を左に見ながら国道を渡り「下の橋」を目指すと、途中右手に、「盛岡城跡公園」（岩手公園）がある。城跡の西側二の丸地区には世評に響く「願はくはわれ太平洋の橋とならん」のフレーズを刻んだ記念碑が置かれている。こちらは、1962年（昭和37年）に生誕100年を記念して設置されたものである。（写真⑦）

博士は盛岡の下ノ橋町（旧鷹匠小路）の生まれである。市民の誇りとする先人の一人としてその偉大なその人間形成の過程が1998年（平成10年）から現在も市内小中学校の子供たちによって学ばれている。

ほかには「初めての平民の総理大臣、



写真⑦：新渡戸稲造の記念公園（盛岡城址公園）

原敬、「戦争を終わらせるため努力した総理大臣、米内光政」、「アイヌ語研究に取り組んだ国語学者、金田一京助」、「ふるさとを想う天才詩人、石川啄木」が選ばれているが、彼らとともに博士の写真入りの「夢と誇りと志を」のタイトルのカレンダーが毎年新学期にはすべての学校に一斉に掲示される。

「下の橋」を渡ってやや行くと、道路左側の奥まったところが博士の生誕地で「新渡戸緑地」とも呼ばれており、亡くなって五十年目の1983年(昭和58年)に公園として整備された。朝倉文夫作の思索に耽りつづけるかのような博士の座像が設置されており、周囲には留学していた米国のジョンズ・ホプキンス大学から贈られたハナミズキが植えられている。(写真⑧)

博士はカナダのビクトリア市の病院で帰らぬ人となったが、終焉の地ビクトリアと生誕の地盛岡の縁もあって1978年(昭和53年)のバレーボールなどを通じた市民レベルの交流などから始まり、市民が主体となって、当該市と姉妹都市協定を結んだのが1985年(昭和60年)のこと。今年35周年の節目を迎えたが、今も相互訪問など市民同士の交流は盛ん

である。そのような実績もあって、当市は、東京オリンピックのカナダの水球と女子ラグビーのホストタウンにも選ばれている。

「与の字橋」の胸像から新渡戸緑地までの川沿いの道はおよそ700mほど。ユリノキの並木道となっており姉妹都市ビクトリア市に因んで「ビクトリアロード」と名付けられている。沿道には新渡戸家が仕えた南部藩の家紋の双鶴がデザインされたベンチが置かれてある。

十数年前からは毎年春になると、ビクトリアの街に倣って色とりどりの花々からなるハンギングバスケットを街々に飾り、訪れる人々を楽しませている。その数はおよそ800。長く厳しい冬を経た市民にとっての喜びの象徴であり、今や盛岡ならではの風物詩となっている。(写真⑨)



写真⑧：新渡戸稲造銅像（新渡戸緑地）



写真⑨：ハンギングバスケット

その花々が飾られる頃には、小中学生たちの少人数のグループがメモ帳などを片手に歩いているのが見かけられるようになる。修学旅行の子供たちである。各地から訪れる子供たちにも博士の像はいつも慈眼をもって微笑んでいるようにも見える。

博士の功績は、今なお市民の誇りとして、カナダとの活発な交流や花による魅力ある街づくりに生きている。

寮というものに故郷があるとすれば、佐藤・新渡戸記念寮のそれは盛岡である。盛岡を訪えば、創寮の頃の先人たちの警咳に接することができるかもしれない。

参考資料

遠藤守夫編著『白聖の先人 155 人』（平成 12 年）岩手県立盛岡第一高等学校

小笠原正明『佐藤昌介伝 北大を築いた南部人』（平成 20 年）岩手日報社

『巖鷲寮創立 50 年記念誌（上篇）』（昭和 58 年）（財）巖鷲寮

『巖鷲寮創立 50 年記念誌（中篇）』（昭和 59 年）（財）巖鷲寮

『巖鷲寮創立 50 年記念誌（下篇）』（昭和 62 年）（財）巖鷲寮

藤井 茂『いわて人夜話』（令和 2 年）（一財）新渡戸基金

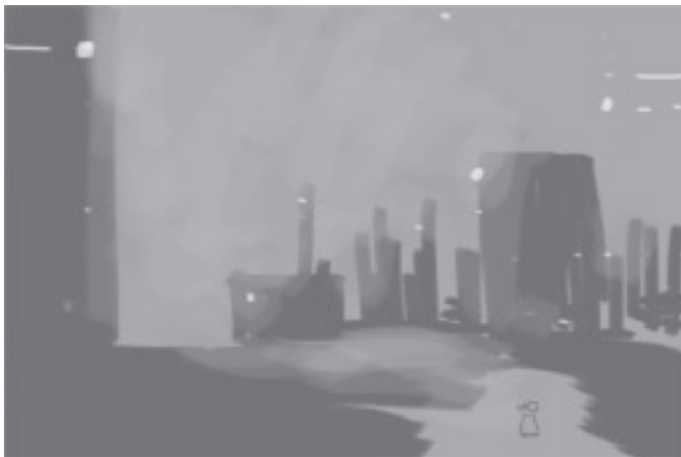
『盛岡市・ビクトリア市姉妹都市連携 20 周年記念誌』（平成 18 年）盛岡市・ビクトリア市姉妹都市連携 20 周年記念事業実行委員会

『盛岡市・ビクトリア市姉妹都市連携 30 周年記念誌』（平成 28 年）盛岡市・ビクトリア市姉妹都市連携 30 周年記念事業実行委員会 ↩



ふじお ぜんいち

1975年北海道大学法学部卒業卒寮
岩手県庁入庁、地域振興部長等を歴任、企画理事で退職
(独法)岩手県工業技術センター理事長、
盛岡市代表監査委員を経て同市副市長、現在2期目



平成の戊申戦争

(北海道新幹線札幌延伸秘話)

佐藤 馨一

1 始めに

昨年の寮誌において私が元青森県知事北村正哉氏に対して次のような質問をしたことを記しました。

「北村知事、青森県のことを考えると、ミニ新幹線で三沢、野辺地、浅虫温泉を通る方がメリットは大きいと思います。それなのになぜ八甲田山トンネルを作つてまでフル規格にこだわるのですか。」

北村知事は私のことをジロリと睨み、「佐藤君、政治家の決断は常に国民の幸せを考えて行わなければならない。ミニ新幹線にすると青森県民のためになる。しかし新幹線は日本の背骨として札幌まで延伸しなければならない。そのためにはフル規格新幹線を選択するべきだと考えたのです。」

当初、この回答に感激しましたが時間が経つにつれ、あまりに格好が良すぎると言うようになり、北村正哉氏の経歴を調べました。正哉氏は北村豊三氏の長男として上北郡三沢村（現三沢市）に生まれました。北村豊三氏は元会津藩士で、戊辰戦争（会津戦争）に敗北した後、会津藩

士が斗南藩士として現在のむつ市に転封された際に三沢村に移住し、日本最初の西洋式牧場である「開牧社」の経営に参加しました。正哉氏は旧制野辺地中学（現青森県立野辺地高等学校）を卒業後、盛岡高等農林学校（現岩手大学）に入学し、そこから大日本帝国陸軍の獣医部に編入学し、獣医少佐として出征し、インドネシアで終戦を迎えています。帰国後は大三沢町の町議に初出馬して、当選し、任期の途中で青森県議会議員となり、連続3期つとめました。その後副知事を3期つとめ、1979年（昭和54年）に青森県知事に立候補して当選し、連続4期をつとめます。副知事時代から東北新幹線の青森までの早期整備を目指し、地元では「ミスター新幹線」と呼ばれていました。

図1は斗南藩の位置図であり、所領は3万石というものの大部分は火山灰に覆われ、実質の収量は7000石に過ぎませんでした。この地に1万7000人あまりが入植し、その多くが悲惨な生活を余儀なくされました。生活苦から多くの藩士が各地に離散していきました。さらに明



図1 斗南藩の位置図

治政府（薩長政権）は過酷であり、斗南藩内にあった大湊港を軍港化し、大日本帝国海軍大湊警備府を設置するために残っていた藩士を所払いにしました。所払いされたおよそ 50 戸の斗南藩士が札幌市の琴似屯田兵村に入植を希望し、受け入れられました。しかし明治政府は斗南藩士をさらに追い込み、余市への移住を命じます。余市に定住した斗南藩士は稲作のできない地で果樹栽培をはじめ、成功します。ニッカウヰスキーの創業者である竹鶴政孝は「大日本果汁株式会社」を余市町に設立しました。その背景にはウヰスキー製造に不可欠な泥炭（PEAT）が余市町の近郊で採掘できることと、ウヰスキー醸造の期間中にリングなどの果汁を販売して会社経営を行う見通しがあったことによります。

2 歩道新設問題

私は 1973 年（昭和 48 年）に北海道開発局土木試験所から小樽開発建設部小樽道路事務所工事課計画係長に配置転換されました。担当する主な国道は函館～倶知安～余市町～小樽市～札幌をつなぐ一般国道 5 号線の維持管理、新規計画の策定でした。赴任早々、余市町で一般国道 5 号の歩道設置問題がおきました。通学者の安全確保のために国道に歩道を新設することになり、そのための用地を買収することになりました。大半の地権者は通学路ならと快く応じてくれました。しかしある地権者だけは役所には自分の土地を絶対売らないと主張し、用地交渉は難航しました。このため、担当係員が係長であった私に地権者を説得して欲しいとの依頼がありました。それまで研究業務に従事していた私には用地交渉の経験

はありませんでした。しかし、断る理由もなく、係員と地権者を訪ねることにしました。

地権者の家は一般国道5号の脇にある広い果樹園の中にありました。身分を明らかにし、用地の件で話をしたいと言ったら、茶の間に通されました。茶の間からふと奥の方にある仏間を見ると、仏壇が大きく立派で、北海道では見たことのないものでした。しかも漢字の掛け軸は格調のあるものでした。初対面の挨拶が終わった後、私は「失礼ですが、ご先祖は斗南藩の方ではありませんか」と尋ねました。地権者は驚き、「係長さん、斗南藩を知っているのですか」と聞いてきました。私は自分の誕生地が津軽藩の弘前で、その後南部藩の盛岡で小学校、中学校、高等学校を卒業したことを述べました。さらに「戊辰戦争の時は南部藩、津軽藩は会津藩と共に奥羽越列藩同盟を結び、薩長の官軍に抵抗しました。会津藩は敗戦後領地が召し上げられ、斗南藩に移封され、一部の藩士が琴似の屯田兵になり、さらに余市に流された」ことを話しました。地権者は非常に驚き「道庁の役人が斗南藩のことをこれだけ知っていると知らなかった。」私は「道庁の役人ではなく、北海道開発局という国の役人です」と述べました。さらに「通学路を作るためにあなた様の土地を少し譲って欲しいのですが」と頼みました。地権者は

「私は道庁の役人は嫌いだけど、あなたを気に入った。好きなだけ土地を持って行け」と承諾しました。

事務所に戻り、同行した係員は、所内の皆に次のように説明しました。「今度の係長は現場の経歴はないが、ものすごく歴史に詳しく、その知識で地権者を説得した。あの係長はたいしたものだ。」

3 青森県知事との共闘

ミスター新幹線と言われた北村氏が、長年にわたり運輸省と新幹線規格を巡って論争し、陳情してきました。しかし運輸省の牙城は崩せませんでした。そこで一時的にミニ新幹線を受け入れることにし、東北新幹線八戸～新青森がミニ新幹線規格で着工されることが正式に決まりました。その後、「やはりミニはダメだ、フルでなければ」とごねたわけです。運輸省は激怒し、北村氏の運輸省出入りを厳禁しました。青森県はミニよりフルの方が良いと言う主張の論拠を求めていました。青森県庁は日本における交通学の研究者の業績を調べ、私に目を付けました。県庁の方が北大を訪問し、ミニ新幹線をフル新幹線に変更する理論の確立を依頼しました。私は喜んでその申し出を受け入れ、北村さんとの共闘が始まりました。

私は早速、運輸省系のある調査財団から依頼された論文で、「ミニ新幹線は初期投資が少ないが、時間短縮効果も小さく、

表1 ミニ新幹線と在来線特急の費用効果分析表

<p>秋田新幹線(ミニ新幹線)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・盛岡～秋田(127.3km) 所要時間:1時間47分 ・線路工事費:約607億円 ・車両費:約310億円
<p>東北本線(在来線特急:津軽)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・八戸～弘前(133.4km) 所要時間:1時間37分 ・線路工事費、車両費の増加は無い

このような投資は古来、我が国では「安物買いの、銭失い」と戒めてきた」と書きました。この論文を読んだ運輸省の高官は激怒し、私に原稿を依頼した財団の幹部を厳しく懲戒し、私に対しては「日本の運輸行政を惑わせる不逞の輩だ」と、全ての運輸省関係の委員会から排斥しました。

わたしはすかさず、ミニ新幹線の秋田新幹線と東北本線の特急津軽の比較をして反論しました。JR 東日本は東北新幹線八戸開業に合わせて、八戸～弘前までの在来線特急「津軽」を創設しました。表1にあるように八戸～弘前の鉄道距離は133.4kmあり、この間を1時間37分で走行します。新規投資はほとんどありません。これに対して秋田新幹線の盛岡～秋田間の鉄道距離は127.3kmであり、この間を1時間47分で走行します。このために線路工事費607億円、車両費310億円が投資されました。しかも八戸～弘前に比べて約6kmも距離が短いのに、所要時間は10分も長い結果になりました。これはまさに「安物買いの銭失い」

の見本です。

4 おわりに

北村正哉氏が東北新幹線をミニからフル規格に変更した心の底には、斗南藩で苦勞した同郷の士の行く末を見ていたと私は確信しています。北村氏は運輸省に対し平成の戊申戦争を仕掛けました。太平洋戦争の敗戦後、旧内務省は解体され、自治省、建設省、運輸省、厚生省が発足しました。この中でも旧内務省(薩長政権)の伝統を強く引き継いだのが、運輸省だと言われています。東海道新幹線が成功を収めると、すぐに山陽新幹線の建設を行い、1975(昭和50年)に岡山～博多間が開業します。東北新幹線は1982年(昭和57年)に大宮～盛岡間が開業し、1985年(昭和60年)に上野～大宮が開業します。空港整備でも九州が優先され、各県にジェット空港が整備されました。大水深港湾も九州、中国地方(薩長藩地域)が優先されて整備されてきました。究極は新幹線整備のスキームです。奥州越列藩に連なった会津藩(福島)、庄内藩(山形)を結

ぶ新幹線はミニ新幹線であり、南部藩(盛岡)から久保田藩(秋田)もミニ新幹線です。これに南部藩(八戸)、津軽藩(青森)を結ぶ新幹線をミニ規格にするというのは時代錯誤もいいところです。会津藩士の末裔であった北村正哉氏が運輸行政に不信を持ち、八戸～新青森をフル規格の新幹線をつなぎ、それを北海道に延伸する

構想を持ったことは良く理解できます。しかも北海道新幹線は余市町をかすめて通ります。新幹線余市駅はありませんが近くに新小樽駅があります。会津と余市は北海道新幹線と東北新幹線で結ばれます。

これが北村正哉さんの描いた地域計画の最終形だったと信じています。☞



さとう けいいち

1967年 北海道大学工学部卒業卒業
建設省を経て北海道大学工学部土木学科教授、北海道大学名誉教授
北海道科学技術賞、札幌市市政功労賞、都市計画行政功労賞受賞



「大正泥流九十年」によせて 泥流地帯の復興にかけた農業技師 猪狩源三の生涯

猪狩 昌和

寮誌への寄稿にあたって

私は学園紛争と70年安保闘争の最中に卒業しました。巖鷲寮には1967年10月から卒業までの2年半お世話になりました。当時の寮はクラーク会館横の現在北大生協の店舗の所に、県人会の寮としては、ほぼ大学の構内と言って良い、一等地にありました。

これから寄稿する内容は私の祖父猪狩源三の生涯を綴ったものです。

私の父が早逝したこと、祖父が北海道に住んでいて、私が中学生の時に逝去した関係もあり、「私は会った記憶」がありません。

巖鷲寮に入寮当時、「巖鷲寮設立基金奉加帳」があり、佐藤昌介総長はじめ、そうそうたる方がたのお名前の中に祖父猪狩源三の名前がありました。当時は「そんなものか」ぐらいにししか受け止められませんでした。リタイヤ後、私の叔父から源三についての調査を依頼され、調べてい

るうちに、このことを思い出し、巖鷲寮理事長であった小笠原先生にお会いし、ご教示を頂いたこともありました。

その後、源三の生涯をまとめたもの「かみふらの郷土をさぐる」34号（上富良野町郷土をさぐる会編集）と「賢治学」第4輯（岩手大学宮澤賢治センター編）に投稿したものを、小笠原先生にお送りした所、先生から「寮誌へ寄稿するよう」依頼があり、一部加筆訂正したものを寄稿させて頂くことになりました。

当初は、「身内のため」としてまとめたものであり、できるだけ客観的に記述したいと思いつつも主観的な部分も多く、ご笑読頂ければ幸いです。

(2020年8月1日)

はじめに

今年は、1926年（大正15年5月24日）に起きた「十勝岳爆発」から90年を迎える。この噴火により発生した「泥流」（大正泥流）により144名の犠牲者と、当時の



北海道農事試験場時代の源三（前列左端）。1922年7月10日撮影

上富良野村、中富良野村、美瑛村の開拓農地を荒廃させる大きな被害をもたらされた。

この泥流によって不毛となった開拓地を再生しようと多くの人々が立ち上がり、再び水稲の実る土壌を作ろうと、再興への苦労と努力を重ねた人々の記録は、1977年（昭和52年）に新潮社から発行された三浦綾子著の「泥流地帯」に小説化されている。

猪狩源三は、当時北海道農事試験場の農芸化学部主任という研究員であった。戦後も北海道庁の農業技師としてこの地の土壌改良と復興のために生涯を捧げた。

この小文は「大正泥流」の被害地の復興にかけた一人の農学士が存在したことを記録に残したいとの思いからまとめたものである。

大正泥流と猪狩源三

1977年（昭和52年）に新潮社から発行された三浦綾子著の『泥流地帯』は、現在の美瑛町、上富良野町、中富良野町を襲った大正15年の十勝岳噴火による泥流被害とその復興にかける被害地の人々の史実を丹念に調査し書かれた小説である。

『(続) 泥流地帯』には十勝岳泥流にめげず復興に汗を流す主人公達を励ます農業試験場と職員の活躍が記載されている。

「米が出来るのか、農業試験場の技術者たちがそれを調べてくれるべ……」「農業試験場の調べて復興が可能らしい」と。

この小説を書くにあたって、三浦綾子氏はその参考資料の中に『北海道農事試験場報告第39号』を挙げている。

この報告書は1940年（昭和15年）3月発行された『十勝岳爆発流泥に関する調

査成績』と題する136頁に渡る報告書で、元技師猪狩源三の名で発表されたものである。

この報告書は北海道農業試験場(現独立行政法人北海道農業研究センター)図書館に保存され閲覧できる。

この報告書を見ると十勝岳爆発後、その影響の調査のために、もっとも被害の大きかった上富良野村、中富良野村、美瑛村の三ヶ村に猪狩源三が北海道農業試験場農芸化学部主任時代より何度も通い調査が続けられたものである。

その調査内容は「流泥の分布・性状」「農産物被害の状況」「流泥による直接有害作用について」「有害原因物の調査」などの記載がある。そしてこの調査は、当時の試験場の化学関係職員の総力によって調査分析が行われ、各種の栽培試験などを含めて、努めて短期間に流泥の理化学的性状、流泥の植生に対する有害成分及有害主原因を明らかにし、更に流泥災害地に対する改良法まで明らかにしている。この報告書を基に、当時の北海道庁はじめ上川支庁、災害地町村の総力を挙げた災害復興と土壤改良事業がすすめられた。

源三はこの調査の途中1930年(昭和5年)から12年間岩手県農事試験場長として赴任し、退官後は北支(中国北部の地)で仕事をしていた。

戦後、1946年(昭和21年)再び北海道に戻った源三は、北海道庁経済部農業改

良課技師として、泥流によって、不毛となった開拓農地の土壤改良の指導に当たった。

上富良野町郷土をさぐる会によって編集・発行された『機関紙 郷土をさぐる(第5号)』(1986年 昭和61年4月1日発行)に大正10年に上富良野町に入植された仲川善次郎氏(明治34年2月5日生)の「日新ダム完成まで」という回顧録の中に次のような記載があります。

「食料増産の時代であり、上川地方開発期成会も昭和28年以來戦後の混乱から立ち直って、この山麓こそは終生の楽土たれと悪条件を克服し新しい農業計画を実現せんとする農民の意思に応え、北海道庁嘱託専門技術員猪狩源三氏に依り泥流被害土壤に関する2ヵ年に亘る現地調査が行われた。採取土壤の分析等を行い、其の報告書は昭和30年に発表された。更に研究が進められ昭和32年2月第二報が出された。其の後、農業専門技術員千葉登氏他、地元農業改良普及員各位の献身的な努力によって、昭和37年2月十勝岳泥流地水田の土地改良並びに肥料試験調査報告書が第七報として発行され最終的なものが纏ったのである。」(原文のまま)

ここに記載のある昭和30年に発表された報告書は1955年(昭和30年)6月25日に北海道技師猪狩源三の名で発表された『十勝岳山麓地帯に於ける酸性灌漑水並びに流泥被害地土壤調査報告書』であ

る。

この報告書の冒頭に次の記載がある。
「爆発当時の上富良野村長故吉田貞次郎氏は筆者らと共に災害地の復興に対し誠に涙ぐましく献身的努力を払われ今日の復興は全く氏の奮闘に負うと云うも過言でなく、今や故人となられたが真に銘記すべき恩人であると思う、筆者退道後は吉田村長よりの毎年の報告感謝状により推移を知るのみであったが特に昭和十八年筆者は北支の異郷に在って吉田村長より水稻の見事な作況を撮った写真と共に感謝の書状に接した時は全く今昔の感禁じ得ず多大な喜びを覚えると共に更に益々のご多幸を異郷に在って祈った者である……」

猪狩源三は北海道庁の嘱託技師として、先の報告書（第一報）後、同名の第二報が2年後の1957年（昭和32年）2月に、翌年『十勝岳爆発三十年後に於ける流泥被害地土壌に関する調査研究報告（第三報）』（昭和30年3月）を発表している。

そして1958年（昭和34年）2月に発表した『十勝岳流泥地水田改良についての調査成績報告（第四報）』を最後にその2か月後の、同年4月19日札幌市にて逝去しています。

その後、北海道農業専門技術員技師千葉登氏や北海道農業改良普及員技師片井義成氏によって1962年（昭和37年）2月『十勝岳流泥地水田の土地改良並びに肥

料試験調査報告（第七報）』で最終的にまとめられています。このことから、「十勝岳流泥地」の土地改良事業の調査研究と指導は猪狩源三のライフワークであったと思われまます。

猪狩源三の略歴

猪狩源三は明治10年頃、現在の岩手県盛岡市から当時の北海道札幌郡豊平村に入植した猪狩庄右エ門、源吉父子の開拓二世として、1889年（明治22年）3月1日北海道岩見沢市で出生。1914年（大正3年）東北帝国大学農科大学農芸化学科（現北海道大学農学部）を卒業し、同科の副手から北海道農事試験場の技師として従事した。昭和5年岩手県農事試験場長として赴任するまで、和歌山県農事試験場技師、民間の古谷製菓化学研究所主任などを歴任し、北海道帝国大学となった母校の講師も勤めた。再び北海道農試に復職し農芸科学部主任などを歴任した。

この間1918年（大正7年）「実験拘藤（クエン）酸製造法」（有隣堂出版）の著書や「オブラート製造法」の発明（古谷製菓化学研究所時代）そして北海道農事試験場時代には1926年（大正15年）5月の十勝岳爆発による泥流被害と土壌調査に携わった。

1930年（昭和5年）、同郷の先輩でもある当時北海道帝国大学総長佐藤昌介の勧めもあり、北海道農事試験場から岩手県

農事試験場長として赴任した。

十勝岳爆発流泥に関する調査研究

源三は第十代岩手県農事試験場長として12年間在職し、1942年(昭和17年)に退官した。その間、北海道農事試験場時代から調査に参加していた『十勝岳爆発流泥に関する調査』のとりまとめにかかった。

また「泥炭地水の緩衝能に就いて」(日本土壤肥料学会誌『土壤肥料学雑誌』1931年12月10日号)や「土壤酸性矯正用石灰岩ノ粉末ニ就テ」(『北海道農事試験場報告』32号 1935年発行)など、レポートはいずれも発表は岩手県農事試験場長時代のものであるが、研究は北海道農事試験場時代からのものであり、泥炭地の土壤改良や酸性土壤改良材としての「石灰岩末」の肥料としての効用についての研究をすすめていた。

1940年(昭和15年)に発表された『北海道農事試験場報告』第39号「十勝岳爆発流泥に関する調査成績」は、その後「十勝岳爆発二十年後の植生」(1949年 昭和24年『北方林業』第1巻83頁)や「十勝岳流泥跡地の植生の推移」(1960年 昭和35年『北方林業』12巻11号・12号)などの報告書や北海道旭川土木現業所の「富良野川における大正泥流の痕跡調査」(発表年不明)北海道開発庁の『五万分の一地質図幅説明書 十勝岳』(1963年 昭和38年

3月)などの調査資料にも活用されている。

猪狩源三と宮澤賢治

宮澤賢治の晩年、昭和6年(賢治35歳)、肺の病も小康状態の時期、工場主であった鈴木東蔵の依頼で東北砕石工場の嘱託技師として、炭酸石灰(タンカル)の製造指導と販売に駆け回っていた。

その最中、4月4日の日付の工場主鈴木東蔵あての葉書に「本日は当地方煙山不動見前の各組合を歴訪致しいづれも注文取纏の約を得候。並びに朝試験場長と会見致し大に激励の辞を得候。以下 略」(※新校本宮澤賢治全集第15巻)との記載がある。

その後の4月7日賢治の盛岡高等農林学校時代からの親友であった工藤藤一が3月31日付けて岩手県農事試験場技師の辞令を受けたお祝いとして書いた工藤藤一あて封書には次の記載がある。「日報紙上で拝承いたしました処 この度はまことにお芽出たう存じます。……(中略)先日肥料設計の実際色々御指導を得たく参上いたしましたのでしたが萩荘村御出張中でありましたので、三浦様を以て場長殿に一寸お目にかかり石灰の方のお礼も申し上げて参りました。以下略」(※同)

ここで記載されている当時の岩手県農事試験場長が猪狩源三である。

賢治35歳、その前年(昭和5年)に北海道農事試験場から岩手県農事試験場長と

して赴任してきた源三は 42 歳。

1931 年 (昭和 6 年) 4 月 4 日「試験場長と会見致し大に激励の辞を得候」(鈴木東蔵宛葉書)「場長殿に一寸お目にかかり石灰の方のお礼も申し上げて参りました」(工藤藤一宛封書)という賢治の一文から、源三と賢治の対話がどんな内容であったのか、興味が湧くところです。

源三と賢治

賢治と面会した昭和 6 年までの源三の足跡を辿ると、賢治と同じ、土壌改良のための「肥料学」や「緩衝能」の研究をすすめており、当然「炭酸石灰」の効用や、岩手県内の小岩井農場をはじめ、岩手山の噴火による火山灰土壌の改良のために、「安価で効用の高い石灰岩の碎石 (粉末) について」関心を持っていたものと思われます。源三の「土壌酸性石灰岩ノ粉末ニ就テ」のレポートは石灰粉末の効用についてその粒度に注目し研究したものである。その関係からも、賢治から「炭酸石灰」の効用について相談を受けた試験場の主任技師となった工藤藤一氏の報告に対して岩手県農事試験場の「推奨品」として決済したことも頷けるところです。

賢治の手紙の中の「石灰の方のお礼を申し上げた」の一文はこのことを指しているのではないかと、そして土壌改良という同学の同志として会話が弾んだのではないかと想像されます。また、工藤藤一氏

から賢治が、盛岡高等農林学校 (現岩手大学農学部) を卒業し、稗貫郡立稗貫農学校 (後の花巻農学校) の教職時代や羅須地人協会で農村青年への農業指導を進めてきた活動について聞き及んでいたのではないかと。そして源三自身の北海道の開拓農地の「土壌改良への想い」が重なり、そこから賢治の農業指導者としての「活動」と碎石工場の技師としての「仕事」への「励まし」の会話となったのではないかとという想像が膨らみます。

岩手県立農業試験場時代の源三

1951 年 (昭和 26 年) 岩手県立農業試験場創立五十周年記念に編集された「岩手県立農事試験場五十年の歩み」に当時、北海道庁経済部農業改良課技師であった源三は「岩手の思い出」という 12 年間に亘る、場長時代を回顧した一文を寄稿している。その内容は場長時代に推奨した農事研究の思い出や場長として各種の委員会の委員や審査員、ラジオ放送への出演、創立三十周年記念行事などの活動を振り返ったものであるが、その中で、「北海道農試から岩手県農試への異動は同じ郷土出身の当時北海道帝国大学総長佐藤昌介博士からの推挙であった」ことや「毎週土曜日、年休を提供して日帰りの出来る町村での農事講演会を開催した」こと、「昭和六年の三陸大津波とその後の凶作に試験場あげて対策指針を作成し指導した」

こと等。他に「岩手林檎の普及」、「冷害に強い陸羽一三二号の奨励（これは宮澤賢治も推奨したと言われている）」、「甘藷や水田二毛作の奨励」といった、試験場での活動。そして源三自身登山やスキーが好きで、職員と早池峰、岩手山、須川岳、八幡平などの征服したことや、都山流尺八の大師範として自宅で職員有志を教えていた等の回顧が記されている。

おわりに

猪狩源三は1959年（昭和34年）4月19日、北海道札幌郡豊平町にて71歳の生涯を遂げている。源三は晩年までも十勝岳泥流で被害を受けたこの地方の土壤改良事業に携わっていたと思われる。その源三はあの泥流で埋められた土壤が豊かな水田に生まれ変わるその報告書（『十勝岳泥流地水田の土地改良並びに肥料試験調査報告書』第七号）を目にすることは出来なかった。

そして今日「美しい丘陵地帯」として畑作農業が栄え「丘のまち」ラベンダーの咲き誇る観光地として全国に紹介されていることは想像すら出来なかったであろう。

祖父の偉業に今更ながら驚きと尊敬の念を抱くところです。祖父源三の研究がここまで活用されていたことを、没後57年となる盛岡市大泉寺に眠る祖父の墓前に報告したい。（2016年5月20日記）

参考文献

- 猪狩源三「土壤酸性矯正用石灰岩の粉末度に就きて」1935年『北海道農事試験場報告』第32号
- 「十勝岳爆発流泥に関する調査成績」1940年『北海道農事試験場報告』第39号
- 「泥炭地水の緩衝能に就いて」1931年12月10日発行『土壤肥科学雑誌』
- 『十勝岳山麓地帯に於ける酸性灌漑水並に流泥被害地土壤調査報告書』第一報～第四報、1955年～1959年上富良野町・中富良野村発行
- 千葉 登・片井義也『十勝岳泥流地水田の土地改良並びに肥料試験調査報告書』第七報・1962年、上川地方総合開発期成会・上富良野町
- 『機関紙 郷土をさぐる』第5号、1986年4月上富良野町郷土をさぐる会発行
- 『岩手県立農業試験場五十年の歩み』1951年岩手県立農業試験場創立五十周年記念会
- 三浦綾子著『泥流地帯』・『続泥流地帯』1977年・1979年新潮社
- 『【新】校本宮澤賢治全集』第十五巻書簡（本文篇・校異篇）、1995年筑摩書房
- 佐藤竜一『宮沢賢治あるサラリーマンの生と死』2008年、集英社新書
- 鈴木 實『宮沢賢治と東山』1986年、熊谷印刷出版部
- 千葉 明「肥料用石灰資材の粒度研究 ―宮澤賢治の関わりを中心に―」2015年『北水会報』28・29号、岩手大学農学部「北水会」編集 ◀



いかり まさかず

1970年北海道大学工学部機械工学第二学科卒業卒業
北海道大学生生活協同組合の学生理事を務めていた経緯から、
専攻とは異なる産声をあげたばかりの市民生協（現コープさっぽろ）に就職、
「生活協同組合」の仕事に関り、
2012年日本生活協同組合連合会の関連会社を退職

現況：現役時代の趣味は囲碁・登山・読書でした。退職後は「西岡公園“植物の会”」「西岡九条の会」「豊平教会“朝ごはん”（路上生活者への食事提供）」の奉仕活動など地域の活動に参加しています。（札幌市豊平区西岡・在住）

COVID-19 備忘録

長山 由起夫

皆さんが COVID-19=「コロナ」を意識したのはいつからだろうか。当時の新聞を紐解いてみると、中国武漢市では 2019 年から事態が動いていたが、日本でこの動きが報じられたのは 2020 年に入ってからである。この稿では、東京オリンピックが開催されるはずだった「コロナコロナ」の 2020 年のタイムラインを、北海道庁観光局勤務の筆者が、行政の動きの観点も交えて振り返ってみる。

< 1 月 >

8 日	読売新聞が「中国 原因不明の肺炎」と報道
11 日	中国「新種のコロナウイルスの疑い」と発表
16 日	武漢に渡航した日本人の感染確認（国内第 1 号）
23 日	武漢、都市封鎖
24 日	春節
28 日	道内初感染を発表（武漢からの観光客）
30 日	WHO「国際的な公衆衛生上の緊急事態」を宣言
31 日	「中国人入店お断り」の札幌のラーメン屋が全国的に話題に

今にして思えば隔世の感があるが、この時期、北海道の「インバウンド」はまだ好調で、札幌市内のそこかしこに外国

人観光客がいた。新聞上で「コロナ」という単語が出てきたのは、中国政府が「新種のコロナウイルス」と発表した 1 月 11 日ということになっている。

過去に、同様の未知のウイルスとして騒がれた SARS にしても MARS にしても、我々日本人・道民の生活を直撃することはなかったため、17 日の北海道新聞では、SARS、MARS と同じ文脈で「国内の流行の可能性は低い」という元小樽保健所長のコメントが紹介されている。

武漢が都市封鎖されたという話題も、当時は対岸の火事という受け止めだったように感じられ、春節を迎えた中国人の来訪を拒絶する雰囲気はなかった。（だからこそ、ラーメン屋の話は全国的に目立った。）

< 2 月 >

3 日	クルーズ船「ダイヤモンドプリンセス」号の検疫実施
4 日	さっぽろ雪まつり開幕（～11 日）
12 日	WHO、新型コロナウイルス感染症を「COVID-19」と命名
14 日	道、道内在住者の感染を発表。感染者の個人情報を公表せず、一部混乱
17 日	東京マラソンの一般参加中止

19日	さっぽろ雪まつりスタッフの感染を発表
20日	クルーズ船で初の死者 安倍首相、イベント自粛要請
26日	道知事、道内小中学校の臨時休業の要請
27日	安倍首相、全国の小中高臨時休業の要請 北海道で15人
28日	北海道で12人、知事緊急事態宣言

さっぽろ雪まつりを翌日に控えた3日の新聞では、札幌の宿泊キャンセル13万件の報道があり、観光業界の経済的影響を懸念するトーン。このころのCOVID-19報道は「クルーズ船」にフォーカスされ、世の中はまだ「水際でとどまっている」という認識だった印象（実際には様々なルートで既に国内に入っていたわけだが）。筆者が6日に東京出張したときの会議も「3密」で、会議中にマスクをしている人はほぼいなかったと記憶する。ただし、マスクは店頭から早々と姿を消し、デマとその保身行動の結果、トイレトーパーまで店頭から消えるなど、不安の空気



が次第に我々を覆い始める。

北海道では、冬のイベント由来とみられる患者の発生がピークに達し、道独自の緊急事態宣言を発出するに至った（それでもこの当時のピークは20人にも達していない）。ちなみに筆者は、この知事の緊急事態宣言の前日（27日）まで、アメリカからの来客をアテンドする道内出張をしていた。

<3月>

8日	大相撲春場所無観客開催
9日	中国観光からの入国制限発効 プロ野球開幕延期決定
11日	WHO「パンデミック」宣言 選抜高校野球開催中止決定
13日	アメリカ、国家非常事態宣言
17日	ドイツ国境封鎖、ヨーロッパで都市封鎖相次ぐ
18日	日本、水際対策として、イタリア、スペインなど流行国からの入国拒否
19日	道の緊急事態宣言終了（第1波ほぼ収束） 専門家会議で「3密」初出
24日	2020東京オリンピックの1年延期を正式決定
25日	東京で患者急増（40人） 志村けんさん陽性報道
26日	政府対策本部、北海道対策本部設置 入国拒否を21か国に
30日	志村けんさん死去

欧米を中心に感染が顕著となり、「ロックダウン」という言葉が飛び交う。鈴木知事は、緊急事態を宣言した期間の週末、不要不急の外出を控えるよう呼びかけた。ただ、この道独自の緊急事態宣言は、独自だったが故か、全国的には「行動力のある

若き知事」的な、いわば地域マターと捉えられていた感があり、このころ、マスク不足は深刻だったが、「2、3ヶ月で終わるだろう」という多少楽観的な雰囲気が漂っていた。潮目を変えたのは、オリンピック延期と志村けんの死だった。

<4月>

1日	いわゆる「アベノマスク」配布方針発表 入国拒否は73か国に
7日	政府、7都府県を対象とする緊急事態宣言
8日	札幌市長、マスクをし始める
12日	北海道の「第2波」の兆しを受け、道、札幌市の緊急共同宣言
16日	緊急事態宣言を全国に拡大 特定の施設への休業要請
20日	政府、1人10万円の定額給付を決定
23日	道内第2波ピーク（45人の陽性判定者） 巖鷲寮理事会延期連絡 岡江久美子さん死去
27日	入国拒否を87か国に

年度替わりで人の移動があった中、ヨーロッパ由来と思われる感染のピーク（北海道では第2波）が訪れた。大学は授業できず、11日に予定されていた巖鷲寮の歓迎会も中止。新聞のチラシがほとんど入らなくなったのはこの頃。相変わらずマスクは不足し、朝のドラッグストアには行列ができていた。アベノマスクは歓迎されなかった。（註：個人の感想です。）

<5月>

4日	緊急事態宣言の延長正式発表 大相撲5月場所の中止、7月場所の東京
----	-------------------------------------

	開催を発表
14日	道の持続化給付金サポート窓口を開設
15日	宣言の範囲縮小、石狩振興局を除く地域の休業要請解除
25日	緊急事態宣言全面解除

緊急事態宣言が延長され、全国的に不要不急の外出を控えるGWとなった。北海道の観光業は、3月4月の観光客が減る「谷」を、GW需要で乗り切り、息を吹き返すというサイクルを続けているのだが、このGW需要がゼロとなり、観光事業者の苦境が表面化してくる。（筆者も、持続化給付金サポート窓口で電話番をしたが、観光事業者とスナック経営者が多かった。）

職場では在宅勤務や ZOOM 会議が当たり前に。一方、マスク不足は中旬以降、急速に改善し始める。緊急事態宣言も解除され、全国的な第1波は、落ち着いてきた。

<6月>

1日	全ての施設の休業要請を解除
16日	第2回定例道議会開会。「どうみん割」予算成立
19日	都道府県をまたぐ移動の緩和
29日	「岩手に帰るな」のSNSが話題に

Black Lives Matter 運動が世界に広がる中、「ウィズコロナ」はだいたい日常に。観光客の激減に喘ぐ観光業界に対し、割引クーポン発行のどうみん割事業を、当初予定よりも3週間ほど前倒して実施。

（この前倒しにより内部事務が混乱していたのは内緒の話。その後、国のGoToキャンペーンがこのはるか上を行く大混乱の様相

を呈し、「どうみん割はまだ全然まともだよ」
って旅行業界から言われたのも内緒の話。)

<7月>

1日	どうみん割開始
4日	熊本県、鹿児島県で豪雨。球磨川氾濫
6日	福岡県、佐賀県、長崎県に豪雨
8日	岐阜県と長野県に豪雨
10日	Go To トラベル事業、7月22日からの前倒し実施を発表
23日	ススキノにPCRセンターを設置
28日	山形県、秋田県で豪雨
29日	国内感染者数最多。岩手県でも2名感染確認

COVID-19 が小康状態になったことを受け、人の往来で経済を回そうという機運が出てきたが、皮肉にもその動きと軌を一にして、全国的な第2波が襲う。ススキノの店でクラスターが発生し、ススキノにPCRセンターが設置されたほか、唯一の感染者ゼロ県を長らく誇っていた岩手県でも、奇しくも「岩手に帰るな」SNSが話題になった1ヶ月後に、初の感染者確認。相次ぐ大雨特別警報 ⇒ 豪雨災害とも相まって、天皇陛下は大仏を建立して人心の安寧を図るべきではないかと半ば本気で考えていたことを思い出す。

<8月>

10日	甲子園高校野球交流試合
28日	安倍首相辞任表明

第2波の影響でお盆の人の流れは低調。筆者は岩手には帰らず、「オンライン帰省」を試みるも、親のらくらくホンのスマホ

では無理なことが判明し、がっかりしたお盆だった。相変わらず本州の熱波は異常で、熱中症とCOVID-19の症状が似ているため、医療機関が受入に苦慮しているという話題も。

そんな中、歴代最長内閣の記録を塗り替えた直後の安倍首相の突然の辞任表明で、ニュースは一気に政局一色に。

<9月>

14日	管内閣発足
-----	-------

第2波が落ち着きを見せ、自転車通勤ですすきのを通ると、それなりに賑わっていて、マスクなしの酔客が交差点で大声で騒いでいる光景によく出くわした。シルバーウィークの4連休の観光地は、多くの人出で賑わった。「ウィズコロナ」に慣れたということなのか。

<10月>

1日	GoToトラベル、東京除外の扱いを解除。GoToイート事業開始
14日	フランス、17日から非常事態宣言。夜間外出禁止へ
19日	アイルランド、再び都市封鎖
20日	「どうみん割ぷらす」開始
29日	道、警戒ステージを2に引き上げ。11月10日までを集中対策期間に設定

GoTo が本格的に始まり、「ゆるみ」が指摘された一方で、欧米の第2波が、春の第1波を上回る勢いに。道内でも、寒くなり、「密閉」の環境が増えたからなのか、下旬には連日2桁の感染者が報告さ

れるようになる。マスクをしないおしゃべりのリスクが叫ばれ、すすきののクラスターがクローズアップされる。

<11月>

5日	北海道で初めて1日の感染者が100人を突破(119人)
7日	警戒ステージを3に引き上げ。集中対策期間を11月27日まで延長。すすきの地区の営業時間短縮と札幌市との不要不急の往来自粛を要請
8日	3日に行われたアメリカ大統領選で、バイデン氏に当選確実の報道(トランプ大統領は敗北を認めず)
9日	北海道の1日の感染者が200人
16日	来日したIOCバツハ会長が、観客を入れてのオリンピック開催に自信を示す
17日	札幌市の警戒ステージ(道の基準)を5段階の4相当に引き上げ
19日	東京の1日の感染者が500人を突破。菅首相、「マスク会食」呼びかけ
20日	北海道で最多の304人の感染者
21日	東京の感染者が最高の539人に。菅首相、GoToトラベルの見直しを指示
23日	寮祭式典
24日	札幌市宿泊のGoToトラベル及びどうみん割を対象外に
26日	集中対策期間の再延長を決定。札幌市の接待を伴う飲食店に休業要請
27日	東京の感染者570人、最多を更新

道内のみならず、日本全国の患者数がここに来て急増。北海道でも複数の病院でクラスターが発生するなど、医療体制の逼迫が叫ばれた。札幌市は、人口あたりの感染者が全国でも突出して多い地域となり、GoToトラベルがやり玉に。感染症対策の難しさを思い知らされる。

そうした中、寮祭式典を、感染防止対策

を行った上で開催した。マスクなしでおしゃべりするリスクを回避するため、会食なしだったものの、ようやく新入寮生を公式に歓迎することができた。式典の感染防止対策担当として、終了後、大いに気をもんだが、何事もなく本当に有り難かった。

少なくともCOVID-19が薬もワクチンもない病の状態である限りにおいては、仮にCOVID-19に罹患せずとも、すぐそばの医療体制の逼迫に直面し、COVID-19以外の疾病や傷病に対し、望ましい医療を受けられない状況に直面する可能性がある。これからもしかばらくは、マスクと手洗い・手指消毒が欠かせない日々が続いていくのだろう。COVID-19が、ワクチンがあつて薬も効いて治る病気になる日が一日も早く到来することを、今は祈るばかりである。

追記: その後、12月、旭川の医療体制の危機に対し自衛隊が派遣されたり、GoToトラベルの全国一斉停止が発表されたり、イギリスで変異種が見つかったりといった出来事があつたし、1月には東京を中心に緊急事態宣言が発出されたりした。状況が時時刻刻変わっているせいで、校正のたびに原稿の不完全さが目に付き、加筆修正の欲望を抑えられない。お読みいただいた皆さんの読後モヤモヤがあることは自覚しつつ、あくまでもコ

ナ禍の渦中にある 2020 年における主観 ば幸いである。↵
的なクロニクルとしてお読みいただけ



ながやま ゆきお

1991 年北海道大学法学部卒業卒寮

昭和 42 年岩手県一戸町生まれ。北海道経済部観光局勤務。高校生活を盛岡一高自彊寮、大学生活を北大巖鷲寮で過ごし、そのまま道民一世に。最近、仕事でアメリカ人と ZOOM 会議することが多く、自分の英語力のなさを痛感。この歳になっても日々勉強です。



寮の思い出と新型コロナ対策のこれから

豊田 健一

巖鷲寮生および OB の皆さま、ご無沙汰いたしております。一心会会長の小笠原正明北大名誉教授から、2020年度の寮誌へ寄稿を依頼され、卒寮以来、足が遠のいている自分かと思いましたが、意を決して、引き受けることにしました。

今年は特に新型コロナウイルス感染症（COVID-19：以下新型コロナV）という疫病に日常生活から、政治、経済、一般社会など、ほとんどがふりまわされている状況で、しかも東京オリンピックまでも延期となり今迄に経験したことのないような、生活を強いられています。

医療界も例外ではなく、特に内科、小児科、耳鼻咽喉科など外来患者さんが激減して、対策に追われているのが実状です。そこで新型コロナVに関連した話をとられましたので、9月30日現在の状況などをお話するとともに、自己紹介と寮での思い出話を書いてみたいと思います。

自己紹介

自分は盛岡一高から、1978年4月に北大に入学し、入寮させていただき、学部6

年のうち、5年間を寮で過ごしました。1983年3月に寮を出て、1984年3月に医学部を卒業し、大学、関連病院を経て、2006年に今のクリニックを開業して、15年目になります。

自分は、札幌の叔父（岩手県人会、巖鷲協会に入っていた）から、巖鷲寮を紹介されました。親も国鉄職員というサラリーマンでしたので、少しでも、家計にやさしい寮生活を希望したのです。入寮にあたって、必要書類があったのですが、その年の提出論文の一つが、キャンディーズ解散についてどう思うかという命題だったと記憶しています（キャンディーズは、1978年4月に普通の女の子に戻りますと引退しました）。書いた内容はもちろん覚えていませんが、めでたく寮生となり、自転車で、北18条の教養まで、通ったのを昨日のように思い出されます。

学業に加えて、体力無しの自分が、医学部のアイスホッケー部に入部し、練習だ、合宿だと授業の出席日数を常に気にしながら、クラブ活動をしていたのも懐かしく思い出されます。

寮の思い出

1年目の時の先輩、4年生、3年生、2年生の先輩方はとても個性的で、今でも皆様の顔が思い浮かぶほどで、いい意味でも悪い意味でも多くの刺激とご指導をいただきました。

寮生活では、食堂で食事しながら、大学の様子を聞いたり、隣の娯楽室で、麻雀したりと楽しみました。風呂の順番を書きに行ったり、12時前には、余った食事を確保して食べたり、いくつかのルールがありました。また、すすきのに連れて行ってもらったり、アルバイトを紹介されたり、寮の行事も、ダンスパーティーから、寮祭、あと、バスで行ったモーラップキャンプ場の1泊キャンプなど、思い出は尽きません。寮祭の弁論大会も素晴らしいと思い、これぞ、大学生だと感激したのを覚えています。寮母の吉田さんも明るく、元気で、いい人でしたね。

それから、私が入寮時、4年生の及川秀秋さんと2年生の昆泰寛さん(現理事長)と後輩になりますが、横澤宏一さんと寮生活一緒でしたが、3人とも北大の教授となり活躍されており、我々寮生の誇りです。それと、盛岡一高と言えば、高橋広明さん、菊地有三さん、菊地研也さんと高校の応援団長3人も北大に来て、しかも、巖鷲寮生として、ほぼ同じ時期に生活していたなんて、奇跡的な事象ではないで

しょうか？

そんな楽しい寮生活も、国家試験の勉強のため、アパートを借りて6年目の春に退寮しましたが、それ以来、寮へは、足が遠のいております。札幌に行った折に、懐かしい北7条通りを通り、北大に通った道を眺めたり、新築され、きれいになったモダンな巖鷲寮を眺めたりしていますが、なかなか、寮へ入る機会がなく、今に至っています。

寮祭の11月23日は、祝日ですが、自分は透析医療をしているので、休みが取れず、参加できずにいましたが、2020年4月に中川大介さんが苦小牧に赴任して、今年は、寮祭に是非いきましようとして強く勧められていますので、参加したいと思っています。年をとったからなのか、妙に昔のことが懐かしく思い出され、懐かしい人たちにお会いしたいという感情が強くなっているからかもしれません。その節はよろしく願います。

同期会

実は、寮の同期、5人(遠藤正彦さん、小笠原一晴さん、菅野正男さん、佐々木泰弘さんと私の5人)ですが、お互い60歳になるのを記念して、盛岡で会いましょうよということになり、2018年の12月末に5人が盛岡に集結して、飲み会をしました。(次ページの写真)自分は盛岡訪問が、20数年ぶりで、非常に懐かしく、楽

しみでうきうきした
感じで、千歳から、飛
行機で花巻に行った
のを思い出します。私
は少し遅れましたが、
先に飲んでいた4人と
歩調が合うまでに、さ
ほど時間はかかりま
せんでした。30年以上
の年月をあっという
間に飛び越えて、寮生
同士の会話になって



2018年12月29日 盛岡の某居酒屋にて
左から、佐々木、遠藤、豊田、菅野、小笠原の5人です

いました。それぞれの近況や健康状態、寮生の時の思い出話など、話が尽きず、時間はあっという間に過ぎ、2次会の場所に移ったのですが、移動の時間も惜しいという感じで、話が続きました。1年後もまた、飲み会をすることにして、散会しました。

翌2019年12月にも、盛岡で集まり、その時は、菅原和彦さんも参加し、6人での飲み会となり、また、さらに盛り上がりました。2020年は今のところ、未定です。2018年の時は、翌日の日曜日にレンタカーを借りて、盛岡の街を走り回りました。住んでいた所、小学校、中学校、高校とまわり、盛岡城址、八幡宮、高松の池や岩山展望台など、見てきました。故郷を離れて40年以上経ちますが、北海道の街で岩手ナンバーの車両を見つけると、なぜかやさしい目で眺めてしまう自分がいます。

新型コロナウイルスについて

新型コロナVの話に移ります。

概要 中国湖北省武漢市から世界へ広まった新型コロナVですが、9月30日現在、世界では、感染者数は3,350万人に達し、死亡者数は100万人を超えました。1日あたりの感染者数も、20万人、死亡者も4,400人とまだまだ、猛威を振るっています。日本でも、感染者数はのべ83,022人、死亡者数1,568人と、なかなか沈静化しません。感染者数100万人当たりの死亡者数が日本はとて少なく、これにはBCG接種率が関係し、疫学的には、BCG接種率と新型コロナVの感染者数や死亡者数との関連が示唆されますが、因果関係は証明されていません。

原因 コロナウイルスはエンベロープ(ウイルス表面の脂質性の膜)を持つ、RNAウイルスで、従来感冒など急性気道感染症

を引き起こす 4 種類と 2002 年に中国広東省から発生した SARS、2012 年に中東地域を中心に発生した MERS を含め 6 種類です。ある専門家は、新型コロナ V が武漢の市場で自然発生したものではなく、人工的に操作されたものだと言っています。

病態と症状 潜伏期間は約 5 日で、発症前から発症 5 日までに感染リスクがあり、6 日以降にリスクはないことが解ってきました。症状は、発熱、咳、筋肉痛、倦怠感、呼吸困難などが多く、頭痛、喀痰、血痰、下痢などもみられますが、鼻汁、鼻閉は少ないようです。高齢者、基礎疾患（心血管疾患、糖尿病、悪性腫瘍、慢性呼吸器疾患など）があると、重症化しやすいといわれています。感染しても、生来の自然免疫によって治癒する軽症者がほとんどです。ごく一部は重症化や死亡しますが、その比率は季節性インフルエンザより低いようです。感染症法の 2 類感染症相当に指定されましたので、PCR 検査が陽性になれば、症状に関わらず、入院治療になります。

陽性者の多くはウイルスが咽頭に付着しているだけで感染しておらず、実のところ入院の必要がないが、付着しているだけの人と感染した人を見分ける方法がないため、現状では、入院治療せざるを得ないのが実状です。軽症者も重症者も入院治療になるという煩雑さのため、医療

現場は困惑しています。内閣も変わりましたし、近く、感染症の指定も軽減されることでしょう。

治療法 現時点で確立された有効な治療法はなく、基本的には対症療法となりますが、ウイルスの特徴が少しずつ解明され、ポイント、ポイントで効果がある治療薬が使われています。アビガンもようやく、早期の治療開始で、効果が認められ、認可が下りそうです。最終的には、ワクチンの出番を待つしかないようです。

まとめ 新型コロナ V は、基本的には、ワクチン出現までは、確立された治療法もなく、まだまだ、緊張した対応がしばらく続くでしょう。観光や飲食、買い物やスポーツ観戦など、少しずつ動き始めており、世の中は正常化しようと制限解除に向かっています。経済と両立した感染対策が求められますので、しばらく、この流れは変わらないと思われます。しかし、政府としての初期対応は後手に回り、政府の危機管理はお粗末だったと思われます。

厚労省は、平時の組織であって、今回の感染症のように災害とかテロのレベルとなる国家の危機管理に対応できる組織ではなく、粛々と法令順守で決められたことをやるだけの組織です。たとえば、経済、流通、軍事、医療などの国家の危機に対応できる専門家チームが必要ではないでしょうか。その中には、一人の感染者も出さずに任務を遂行した、ダイヤモンド・プリ

ンセス号のコロナ感染対策に乗り込んだ自衛隊の部隊も考慮される組織と思われる。特に、自衛隊のウイルスや細菌を使った生物兵器への対応に訓練を重ねた部隊である、対特殊武器衛生隊も実際に活動していましたので、含まれると考

えます。いろいろな意味で、コロナ後の世界という言葉が独り歩きする中、日本版CDCの創設が待たれるところです。

以上、雑駁ですが、投稿させていただきます。今後とも、よろしくお願いいたします。↵



とよた けんいち

1984年北海道大学医学部医学科卒業、1978年4月～1983年3月まで在寮
医療法人社団 朋裕会 とよた腎泌尿器科クリニック理事長
医学博士



新種セタナキンポウゲ発見の記

本多 丘人

私は岩手県出身で長く北大に勤めていた関係で数年前から財団法人岩鷲寮の役員をさせていただいています。学生のために少しでも何かお役に立つことができたいと思っています。

歩んできた道

札幌に来たのは昭和 45 年 (1970 年) です。それからちょうど 50 年前のことです。当時の日本は高度経済成長期の終わりごろで水俣病をはじめとする公害が大きな社会問題となり、炭鉱事故や鉄道事故なども多発していましたし、毎年全国で 1 万 5 千人以上が交通事故で亡くなっていました (最近年間 3 千人台)。また、ベトナムでは戦争の真っ最中で、アメリカでの反戦運動などに影響されてか学生もいろいろ世界のこと、社会のことを考えさせられていた時代だったと思います。世の中の理不尽や不正 (と学生が感じていたこと) に対して自らの姿勢や考えを表現する学生は珍しくありませんでした。それが学生運動の広がりの一因だったのでしょうか。

東大の研修医制度の待遇問題から始まった学生運動は全国に広がって北大にも飛び火しました。東大より少々遅れて学生のストライキ (授業ボイコット)、大学当局との様々な交渉などもあり、私が入学した年の前年 (1969 年) には教養部の封鎖、図書館の封鎖、事務局の占拠、警察機動隊との衝突のような、北大闘争と呼ばれる激しい学生運動がありました。オンラインもオンデマンドもない時代なので長期にわたって授業などは行われず、盛岡にいた私は、すでに北大に入学していたのに授業がないために帰郷していた友人と山に出かけたりした思い出があります。

北大は理類、文類、医学進学課程、歯学進学課程に分けて入試があり、医進・歯進以外の学生は本人の希望と入学後の 2 年間の教養課程 (現在の総合教育部) の成績で行き先 (学部、学科) が決められていました。現在の総合理系、総合文系にあたります。一浪後なんとか歯進に合格した私は教養部で留年さえしなければ 4 年間の専門課程に進むことが保証されたわけです。

このようなことから、私は勉強する気はほとんどなく、自然保護研究会（今の自然研究会）というサークルに入りました。

自然保護研究会とはいつでも研究をするわけではなく、当時流行っていたレイチェル・カーソンの「Silent Spring（沈黙の春）」を読んだり自然保護運動、環境保護運動などに少々関わったりしたぐらいで、休みを利用して山などを中心にあちこち遊び歩く集団でした。休日は野山に出かけるのが習慣になり、1年目である程度単位が取得できると教養2年目には空き時間が多くなり、さらに授業をサボることも多くなって、夏休み前の期間だけで50回以上も北大植物園に足を運んだのを憶えています。もちろん医進や歯進でも教養時代の勉強が大切だとわかっていた学生はちゃんと勉学に励んでいたわけですが。

なんとか歯学部に移行し専門教育が始まると授業をサボることはできなくなりました。朝から夕方まで空き時間は皆無で土曜日でも授業があったので泊まりで出かけることができるのは連休と長期休暇の時だけになってしまいました。歯学部で4年間過ごし、卒業後一部の人は大学院に進学しましたが自分はきつと近いうちに開業でもするのではないかと思い、また、6年間も大学に通ったうえに大学院の4年間も親に生活費をせがむのも嫌だったので就職の道を選びました。

といっても、就職先は卒業したところ。歯科という狭い分野でも教育・研究のために講座が細分化されていて、私は予防歯科学を選びました。外来診療と基礎的な研究、そして教育も担当するので多忙な生活ではありました。初めは医員という名前の有給職員です。歯学部はできて間もないこともあり（私が4期生）、世の中は歯科医師不足がひどい時代で助手（今の助教）になってもあっさり辞めて開業したりするので医員になって半年ほどで助手の席が空きました。さらに数年間のうちに先輩だけでなく同期の人たちもどンドン辞めてしまい、ガラガラやっているうちに結局は定年まで大学にいました。

現在は助教になるのですら大変で、最低でも大学院卒、博士号ぐらいは取得しておかないと難しいのですが、私たちのころは研究生や助手でも、論博（ろんぱく、論文博士）という道もありました。

結局、19歳で北大に来てから65歳で退職するまでずっと北大に居座り続けたこととなります。そして退職後は総合博物館で微力ながら植物標本整理のボランティアをしているので人生の大部分は北大にお世話になりっぱなしです。（このボランティアでのエピソードとして岩鷲寮創立90周年記念誌に「佐藤昌介、新渡戸稲造と植物採集」という小文が掲載されています。）

歯学部勤めていた頃も休みには野山に出かけては植物を楽しんできました。

一人でやっていた時代が長いのですが、45歳ごろになってやはり仲間が必要と思うようになり、植物を趣味とする人たちの市民団体に入りました。その後別の団体の会員にもなって観察会などの催しにはほぼ欠かさず出るようにしています。

若かったころには主に高山植物をターゲットとして時間と体力を費やしていましたが、時間も体力も減るにつれて次第に平地の植物にも目を向けるようになったのは自然の流れかもしれません。休みの日に、そして出張のついでの時に、道内各地で植物の地理的分布や生育地の環境、種内の変異などにも注目するようになってきました。こうなるとマニアの世界ですね。

「発見」が世に出るまで

6年ほど前、それまでに何度か訪れた、せたな町の自然公園に寄りました。春の連休を利用して道南の数か所を見て回る

一環です。せたな町は「平成の大合併」の時に旧瀬棚町、旧北檜山町、旧大成町の3町合併によってできた町で、札幌からは車で4時間ほど、日本海側のすべての市町村と同様、過疎化・高齢化にあえぐ町です。北は最近有名になった寿都(すつ)町、南は八雲町に接して

います。

この自然公園には沼をぐるりと一周する遊歩道があり、春のミズバショウやエゾノリュウキンカが見ごろの時期には多くの人が訪れます。

6年前(2014年)に気づいたのは湿地の木道のそばで咲いていたキンポウゲ。ミヤマキンポウゲ、エゾキンポウゲ、ハイキンポウゲなどと花がそっくりなのでキンポウゲの一種であることは容易にわかるのですが、キンポウゲの間にはいろいろあり、外来種も各地に定着しているので、ここで見たキンポウゲも外来種かもしれないなと思いながら、とりあえず写真を何枚か撮っておきました。

その後しばらくこの植物は自分の写真ファイルでは「キンポウゲ科不明種」としてありました。私は植物のことをちゃんと学んだことはないため、標本採取や詳細な観察はしないでその場でざっと眺めてその植物が何であるかを判断するのが



お決まりのやり方です。その方法だと自分にとっての不明種が多くなります。類似種がある場合には写真だけで種の同定（その種が何であるかを定めること）をするのは簡単ではありません。花だけでなく葉の形態、脈の様子、茎から出る葉の出かた、茎の毛の有無や形態、その他多くの情報から総合的な判断が必要だからです。したがっていざという時には写真だけではなく本物（標本）の観察が不可欠で、証拠となる標本が存在しなければなりません。

2014年に撮ったキンポウゲの写真は家に戻ってからちょっと調べてみたのですが、やはり写真だけでは判定できず他の不明種とともにお蔵入り状態になりました。なにしろ趣味でやっているだけなので不明種が多くなり、調べるのも大変なのです。

翌年の春にはそこを訪れるチャンスがなく、2年後（2016年）の春、再びせたな町の同じ自然公園を訪れました。問題のキンポウゲはたくさん咲いていましたけれど、やはり他の場所にあるものとはどこか雰囲気が違うようです。雰囲気、印象、ムードで判断してはダメとわかっていますが、葉の形や茎の出かたなどだけでなく全体の風情が確実に違うのです。その場で図鑑を見ても、どうやら同じものは載っていないようです。そこで写真をたくさん撮っておくことにしました。

札幌に戻って再度自分であれこれ調べてもわからないので、自分が会員になっている北方山草会のI氏にメール添付で写真を送って見てもらいました。I氏は過去に自然環境調査の会社をやっていて道内の植物全般に詳しく、一目で1,500種ぐらいの植物は正しく同定できると豪語しているほどの方です。

その結果、「写真だけではわからないので来年の花の時期に見に行く」ことになり、翌年（2017年）の春に現地に足を運んで観察してもらいました。そしてもしかしたら新種かもしれないとの結論になりました。

植物の場合、数年に1回ぐらいは道内で新種が見つかることはありますが、調査がかなり行われている現代では自分にとっては不明種でも、ちゃんと図鑑で調べたり専門家に訊いたりすればほぼ100%それが何か（種名）がわかります。もちろん学名もつけられています。海岸でも湿地でも高山でも水中でも、植物の種（道内で2,500～3,000種ほど）に関しては江戸時代末期からの研究蓄積があつて、その道の専門家によって調べ尽くされているといっても過言ではありません。

新種は、その植物の形態の特徴や生態、類似種がある場合にはそれとの相違点を明確に記述して学術雑誌に投稿し、専門家の査読を経て掲載されることによって確定します。植物は外国との共通種が多

いので国内の類似種だけでなく外国種との比較も必要となり、世界に認めてもらうためには英文の論文が好まれるので植物分類の専門家でないと思われず、書けないように思われます。

そこで I 氏の知己で国立科学博物館植物研究部を定年退職していた K 先生に見てもらおうことになりました。キク科とキンポウゲ科を得意とする植物分類の研究者です。標本を採っていないので、まだ写真だけの情報です。その結果、写真による判定で「このキンポウゲは本州産のツルクイツネノボタンの近似種のような感じがいくつかの点で明瞭に区別できるので新種ではないか。詳しくは来年の花期に現地を調査したい。」というのが K 先生からの返信でした。このように時間がかかるのは、多くの場合、花の観察が欠かせないからです。最適なのは花も果実もあるような時期なのでどうしても適期に限られてしまうのです。

2018 年 5 月中旬、東京から K 先生がやってきました。私の役割は前もって現地での標本採集の許可をとることと宿の手配ぐらいで、先述の I 氏も現地へ同行してくれました。天候にも恵まれて、K 先生は 3 時間ほど詳細な観察、写真撮影、標本採集などに費やしていました。私と I 氏はその様子を窺いながらも暇をもて余していました。

その日の調査を終えて、我々はその公

園管理を担当しているまちづくり推進課・商工労働観光係に挨拶のため、せたな町役場を訪れました。ここで K 先生は「今回調査したキンポウゲの一種はほぼ間違いなく新種です。和名はヒヤマキンポウゲにしたいと思っています」と提案しました。

皆さんはヒヤマってわかりますか？北海道の人なら天気予報などで「渡島檜山地方」などと使われているのでご存じでしょうが、全国的には渡島だって「おしま」とは読めないだけでなく場所もわからない人が多数かと思います。もちろん「檜山(ひやま)」も似たようなものでしょう。このようなことは私が長く北大の学生と関わって得られていた実感だったので、つい、商工労働観光係の町職員に「ヒヤマとセタナ、どっちがいいですか」と訊いてしまいました。名づけ親となる K 先生が隣にいたので失礼かと思ったのは後になってからのことです。それまでヒヤマもセタナも植物名には全く使われていないので植物関係者にとっては似たようなものかもしれません。新種の名前に関する話題はそれっきりでした。

さて、K 先生の現地調査が終わってから、また時が流れました。K 先生は他の仕事がいよいよあつたのだろうと思います。私としても雪が降るまでの間は道内各地での植物観察や、北大勤務時代から続いている歯科関係の仕事も少しはあって、

それなりに忙しい日々を過ごしていたためにキンポウゲのことはあまり気にしていませんでした。

年末になってK先生から「投稿した」と連絡がありました。しかしその後しばらくはメールが来ることもなく、どうしたんだろうか、何かトラブルでもあったのだろうかと思ったりしているうちに再び春が巡ってきてキンポウゲのことは半ば忘れかけていました。投稿した論文に追加や修正があったのかもしれませんが。半年余り経ち、2019年7月に「受理された」と連絡があって、投稿論文がメール添付で送られてきました。投稿論文名は“Two New Species of *Ranunculus* (*Ranunculaceae*) from Japan”、和訳すると「日本のキンポウゲ属 (キンポウゲ科) の2新種」となります。福島県喜多方市で発見されたキンポウゲとせたな町のキンポウゲの2種について新種であることが記載されていました。

なにしろ英文なので、和文の要旨はあるものの、植物関係の学術用語 (英単語) を知らない私にはすぐ読めるようなものではありません。論文の大部分は既知の類似種と新種との形態的差異についてであり、この時に標準和名がセタナキンポウゲ、学名は *Ranunculus hondanus* Kadota となることを初めて知りました。種形容語 (種小名) に自分の名前が入っていてびっくりです。種形容語はその種の

形態の特徴や産地を表現することが多いのですが、K先生は時々種形容語に人名を用いることがあるようです。2種の新種のうち喜多方産キンポウゲの学名に人名を使ったので、ついでに *honda* を使ったということでしょうか。思いがけないことでもあり光栄なことでもあります。しかしそれよりも標準和名にヒヤマではなく町の名前のセタナが採用されたことの方が嬉しいことでした。

校正を経て2019年12月に「今日発刊されました」のメールと論文のPDF (植物研究雑誌 94 巻 6 号) が送られてきました。これでせたな町の懸案のキンポウゲがセタナキンポウゲとして世に出たというわけです。

植物の学名・和名の豆知識

学名はスウェーデンのリンネ (1707-1778) が提唱した二名法により命名されます。リンネは創造主 (神) がお造りになったあらゆる生物の財産目録を作成することを企て、植物だけでも7,000種以上に学名をつけて発表しています。

二名法は「属名+種形容語 (種小名) + 命名者名」が基本です。属名、種形容語はラテン語であり、イタリック (斜体) で表現します。また、属名には男性、女性、中性の「性」があり、それに伴って種形容語には語尾変化があります。この二名法は命名者名がなくても種の区別ができるの

ですが、現代の国際命名規約では命名者名(著者名)をつけることになっています。

なお、亜種、変種や品種の場合には基本となる種名の後に亜種(あるいは変種、品種)の種形容語+その命名者がつくので学名が長くなります。また、混乱を避けるため、種の命名には先取権の原則があつて、早い者勝ちです。

一方、和名は学名とは全く関係なく、自由に決めることができます。古くからよく知られている植物の場合には和名が2つも3つもある場合があります。また、方言と同様に日本の中でも地方によって呼び方が異なる場合もあります。学名が世界共通の名前であるのに対して、和名は基本的に日本国内でだけ通用するものであり、新種の場合には命名者が「標準和名」と称して自由につけることができます。

例えばタンポポという植物は、多くの人はタンポポと呼んでいますが、我々がふだん目にしているタンポポは実はセイヨウタンポポという標準和名があり、外来種です。原産地はヨーロッパで、明治中期にアメリカからサラダの材料にするため札幌に持ち込まれて全国に広がったという説があります。道内には在来種としてエゾタンポポ、シコタンタンポポなど数種がありますが、それらは多くないので今やタンポポといえばセイヨウタンポポのようになっています。タンポポという標準和名の植物はなく、流通している

和名は必ずしも標準和名ではありません。

新聞記事

今年(2020年)3月になって、北海道新聞社のせたな支局がセタナキンポウゲの記事を作りました。役場経由の情報です。せたな支局から電話での取材があり、専門的な内容は東京のK先生に取材するようお願いし、また、誤ったことを書かれても嫌なので掲載前に原稿を送ってもらいました。原稿の修正や写真のやりとりはすべてネット利用。便利になったものです。

3月18日、道新朝刊全道版に「せたなで新種キンポウゲ」の見出しで記事が掲載されてしまいました。取材の段階で、私としては全道的な話題になるのは恥ずかしいので道南版に載せてほしいとお願いしてあったのですが、このころ、横浜に着いたクルーズ船での新型コロナウイルス感染症の発生、道内では札幌雪まつりごろから新型コロナが急速な広がりを見せて2月28日に北海道知事が緊急事態宣言を出して道内すべての小中高が休校になったりしていた時期でもあり、新聞社としては少しでも明るい話題がほしかったのかもしれない。

購読数が減少しているとはいえ新聞の方はたいしたもので、反響がありました。花仲間だけでなく友人・知人から電話やメールがきたりしましたが、自分として

は前々からその場所にあったものに気づきただけで、詳細な調査や学会誌への発表は専門家が行ったので、第一発見者などと呼ばれるのはちょっとこそばゆい感じでした。でもまあ、悪い気はしないものですね。

おわりに

セタナキンポウゲの「発見」は私のようなアマチュアの場合、一生に1回あるかないかのラッキーな出来事でした。公園の遊歩道のそばに咲く花なので、見ている人はいくらでもいたはずですが、皆さんはそれが何かということは気にしないで「まあきれい」程度で済ませていたわけです。今回は疑問をずっとそのままにしないでプロに近い人に相談したのがきっかけになりました。やはり自分で調べてもわからない場合にはその道の専門家あるいはプロに近い人に教えてもらうことが必要です。

情報社会なので巷に情報はあふれています。したがって調べようと思えばかなりの部分までは自分で調べることは可能です。謎は謎を呼ぶのでそれはそれで楽しいものですが、アマチュアには限界が見えています。私が大学の教員だったこ

ろには、自分の専門分野では他の誰かに尋ねることをほとんどしませんでした。それがプロフェッショナルとしての矜持というものかもしれません。そして自分が詳しいことに関して学生にいい質問をされると嬉しかったものです。

アマチュアという立場は気楽にプロの教えを乞うことができるわけで、植物に限らず、隘路にさしかかったら周囲の人や専門家に（学生にとっては先輩や先生に）質問をしてみるのが大事だと思っています。いつまでも知的好奇心を失うことなく、そして周囲に感謝しながら暮らしたいものです。☞



ほんだ おかひと

1976年北海道大学歯学部卒業

2016年北海道大学大学院歯学研究科定年退職

一般財団法人巖鷲寮監事

アンティーク紀行

横澤 宏一

旅に出ると、できるだけ現地の骨董屋（アンティーク・ショップ）に立ち寄るようにしている。その土地の歴史を物語る小物などがあると喜んで買って帰る。かくして身の回りは世界各地で買い集めた怪しげなものであふれ、私は幸せなのだが家族の評価は芳しくない。パリでは17世紀初頭のセヌ川の流域図を買って帰ったが、当時小学生だった娘に「そんな古い地図、今は使えないよ」と言われてしまった。

はじめに一北大の一室にて

12年前に会社員（日立製作所）を辞め、北大の一隅にささやかな研究室を構えている。気がつくくと大学の部屋の中にも研究と関係ない品々が増えている。一番古

いものは中国の前漢時代の青銅製の鏃（やじり）である。当時中国にはまだ鉄の量産技術はなかったらしいから、話は合っている。それにしても「四面楚歌」などの故事で知られる項羽と劉邦は、こういう青銅製の武器で天下を争ったのである。次に古いものは古代ローマ時代の4枚のコインである。1世紀と2世紀のものは銀貨、3世紀と4世紀のものは銅貨である。私が買える程度の値段でこれらが売られているということは、現在でもそう珍しいものではなく、それなりの数がアンティーク・マーケットに出ているということである。2世紀頃までは銀貨が、それ以後は銅貨がローマ帝国で大量に製造され、流通していたことが想像できる。主要通貨が銀貨から銅貨に替わったことは、



ヴェスパシアヌス
（在位 69-79AD）
銀貨



ハドリアヌス
（在位 117-138AD）
銀貨



ディオクレティアヌス
（在位 284-305AD）
銅貨



コンスタンティヌス
（在位 306-337AD）
銅貨

3世紀に鉾山のあるダキア属州（現在のルーマニア）を失ったローマ帝国の衰退を連想させる。コインには当時の皇帝の横顔が刻まれている。1世紀、2世紀の皇帝の横顔はリアルで、確かにこんな人がいたのだなと思えるが、時代の変遷とともに平板的になり、4世紀初頭のコンスタンティヌスの横顔は初期のキリスト教絵画を思わせるほど様式化され、生気がない。のちのルネッサンス芸術を知る現代人の目でみると、これもまた、文化的衰退を見る思いがする。何しろルネッサンスは古代ギリシア文化やこれに学んだ初期のローマ文化の復興を目指したのだから。

スース（チュニジア）

北アフリカは2世紀にローマ帝国の属州になるが、それ以前にはカルタゴが栄え、歴史の古さはローマ帝国に劣らない。チュニジアは地中海に面した北アフリカ諸国のちょうど真真中に位置し、スースも歴史のある町の一つである。その郊外にある考古学博物館を訪ねた。残念ながらその日は休館日で、閉まった扉に貼ってあるアラビア語の張り紙を眺めていると、近くにいた男に話しかけられた。博物館は休館だが、その辺の発掘現場は見る言えることできると言っているらしい。この博物館は発掘現場に建てられており、出土品を展示しているのである。ついていくと、発掘現場のはしごを降り、何か所か

の現場を見せてくれた。現場によってアンフォラ（ワインやオリーブオイルを入れる先の尖った素焼きの大甕）がたくさん土に埋もれていたり、みごとなモザイク画が半分発掘されていたりする。男は現場ごとに熱心に説明してくれるのだが、残念ながら何語で話しているのかすらわからない。モザイク片が大量に埋まっている場所では2～3片拾って私にくれた（おいおい。これは文化財の一部ではないのか？）博物館が閉まっていたのは残念だが、発掘現場を身近に見る経験のほうが貴重である。満足したので帰り際にチップをはずむとともに喜んでいた。後から思えば、男は博物館の休館を知らずにやってくる観光客を待ち受け、発掘現場を（こっそり？）案内してチップをもらっているのではなからうか。それにしても現場では熱心に説明をしていたから、もしかすると本当に博物館の職員だったのかもしれないが。

骨董品には定価がなく、値段は交渉次第である。この国は、骨董にかぎらず、ほとんどのものが交渉価格であった。最初は戸惑ったが、慣れて考え方がわかってくと逆に合理的に思えてくる。価格交渉とは、売りたい側がいくらで売りたいか、買う側がいくらなら買ってもいいかの妥協点でその時点の適正価格を決める作業である。そういう意味ではウォール街や兜町と同じであろう。大きく違うの

は、ここには売り買いする商品がその場にうずたかく積まれているという点である。スーク（市場）で地元の人の3倍の価格を提示されても怒ってはならない。いつでも来ることができて底値で買える地元の人と、明日の朝、日本に帰り、ここには一生来ないかもしれない観光客では緊急性が違うのだから、値段が違って当然なのである。適正価格を決める作業である以上、値切り倒せばいいというものではない。その商品にそれだけの価値があると思ったら、その値段で買えばよい。予想外に高く売れたとすれば、売り手は嬉しいだろう。商品を作った職人のところに行つて、いい値で売れたからもつと作ってくれと言うことだろう。職人も張り切り、いいものを作ろうと工夫を重ねるかもしれない。それを見ていた息子が父親を見直し、仕事を手伝い始めるかもしれない。かくして技術が伝承されるのである。

ジャスミン革命の後、チュニジアがどうなっているのか気がかりだが、私が訪問した当時は治安もよく、人々は温厚で人懐こく、快適な旅だった。フランスの旧保護領であるが、イスラム教国である。イスラムの戒律はあまり厳しくないらしく、お酒も飲める。女性の服装も比較的自由である。そのためか、戒律の厳しいイスラム教国と欧州各国、双方の保養地になっている。キリスト教とイスラム教が交差

する十字路口であり、プールやビーチでは目だけを出した黒いニカブ姿とカラフルなビキニ姿が交錯する不思議な光景を目にすることになる。

パリ（フランス）

パリのアンティーク街と言えは蚤の市である。シテ島をパリの中心とすると、北方にはクリニャンクール、南方にはヴァンプ、東にモントルイユがあり、3大蚤の市と言われる。シテ島からちょうど同じくらい離れていて、地下鉄で行くとどれも30分程度かかる。しかも3つともパリ市内を巡る環状高速道路に隣接している。なぜだろうか？

物品の積み下ろしが楽な高速道路沿いにマーケットができたのだろうか。それは違う。これらのマーケットの歴史は高速道路より古いのである。では、これらの蚤の市をつなぐように高速道路を建設したのか？いくら何でもそれはあるまい。以下は私の推論である。調べてはいないが、たぶん大筋では合っていると思う。

都市に高速道路を建設する場合、用地の確保が難しい。個別に土地を買取するのはまず無理で、日本の首都高のように既存の道路や河川の上を通すか、あるいは何か公共の跡地を使うしかない。都市を巡る環状の空き地は何の跡地であろうか。間違いなく、これはかつて町全体を囲んでいた城壁の跡である。3大蚤の市は、

かつて城壁、というより城門の外側に発展したマーケットであったに違いない。なぜ城門の内側ではなくて外側かというと、城壁の内側は町の行政区域だからである。

町の主要な機能の一つは、マーケットを提供することである。町の真ん中にはマーケット広場があり、広場に面して市庁舎と教会が建てられているのが、ヨーロッパの町の基本構造である。マーケットが開かれる日には担当役人が立ち会い、万一に備えて警備兵も待機する。そうやって安全に売り買いができるわけだが、代わりに役人や兵士を賄うための税金を払わなければ居住や出店ができない。そこで税金を節約するために、多少のリスクを覚悟で市外のマーケットが自然成立する。城門脇であれば人通りも多かったことだろうし、税金分だけ市中より安く売ることもできたろう。その後、町が拡張して古い城壁が無用になり、邪魔にもなるので取り壊されて環状道路が建設されたのである。いかがだろうか。要するに3大蚤の市は、免税店街だったのである。

さて、冒頭に述べた17世紀初頭のセーナ川流域図である。セーナ川とその支流が川岸の諸都市とともに記載された銅版手彩色の古地図で、今は使えないかもしれないが、十分に美しい。これを買ったパリのオールド・プリントの専門店には同じ時代の似たような古地図の在庫が5～

6点もあって、当時大量に印刷されたことが想像できる。それだけたくさん印刷されたのなら、いかに美しくともぜいたく品であるはずはなく、実用品である。では、何に使われたのか？おそらく当時の交通路は陸路より川であった。つまり流域図は現代で言えば道路地図だったに違いない。川の合流点は三差路や四差路であり、ノードやハブに相当し、必ず大きな町がある。そして、パリがある。パリは最も大きな支流であるマルヌ川との合流点直下であり、手ごろな大きさの中洲(シテ島)もあって船の通行も管理しやすい。セーナ川流域全体のボトルネックに位置するその立地は必然であり、北フランスに広がるセーナ川流域経済圏を掌握できる。

ちなみにパリの城壁は2度にわたって拡張されていて、17世紀当時は第2期の城壁が市域を定めていた。現在、例の環状高速道路が巡っている場所に相当する。クリニャンクールなどの免税店は、この頃に繁盛していたことだろう。

タリン (エストニア)

エストニアはバルト三国の中で最も北に位置する。フィンランド湾をはさんだ対岸にヘルシンキがある。ヘルシンキと首都タリンの間は1日に何本もフェリーが行きかい、日帰りができる。フェリーは5万トン級の豪華客船で、片道2時間とはいえ国際線の船旅になる。船内は免税

店が充実していて、物価の安いタリン市内や、船内の免税店での買い物を目当てにヘルシンキから往復する人も多いらしい。

タリンの旧市街は今でも城壁に囲まれている。城壁を取り壊さず、少し離れたところに新市街を作った都市の一つである。城壁内の景観も保存され、どこで写真を撮っても絵本のように美しい。旧市街にある市立博物館の3階には説明員の老人がいて、エストニア独立までの苦難の歴史を語って尽きることがない。エストニアが独立を失ったのは700年前にさかのぼる。デンマーク軍との会戦で緒戦は優勢だったのだが、突如天から旗が舞い落ちてきたのを機に戦局が逆転し、大敗してデンマークの支配下におかれたのだという。デンマークでは同じエピソードが建国神話になっており、落ちてきた旗の意匠は現在のデンマーク国旗に受け継がれている。エストニアはその後、スウェーデン、ロシア、ナチスドイツ、ソ連などの支配を経て、ついに1991年、悲願の独立を果たした。老人は独立の記録映画を見ると盛んに勧めるのだが、一通り見るだけで2日かかると真顔でいうので固辞した。「たった2日です。我々は独立を回復するまで700年かかった」と老人はどこまでも真顔である。

旧市街の中心にはマーケット広場に面して壮麗な市庁舎と教会があり、広場の

一角の建物に世界最古の一つという薬局（ヨーロッパには世界最古を称する薬局がいくつかあるが、古すぎてどれが最古かわからないらしい。発展して大学の薬学部や医学部になっているところもある。）が入っている。同じ建物には骨董屋が何軒かあるので、その一軒に入ってみた。アイコンや食器類と一緒に旧ソ連軍の装備までが雑多におかれている小さい店であった。主人は屈強そうな親父である。中国人かと聞くので、日本人だと答えると寄せ書きのある日の丸を取り出した。第2次世界大戦中に日本軍の兵士が持って出征した日の丸で、墨痕鮮やかに「武運長久」と書かれている。私に見せたのは、その意味を聞きかかったからであった。駐在武官の将校ならともかく、応召兵がこの辺まで来たとは思えない。どこで手に入れたのかと聞くと、アメリカ人からだという。持ち主であった中村という兵士は日本には還らなかつただろう。しばし戦争の話をした。ソ連時代が長かつたせいとか、エストニア人は日本に好意的である。ウオッカを飲むかというので、2人で一気にあおった。乾杯したウオッカは一気に飲み干すのが作法である。

店内を眺めていると、120年前の日本製という金属製の小さいカップを出してきて私にくれた。底にメイドインジャパンの刻印がある。それはいいが、表面の浮彫はニューヨークの観光名所である。親

父は意味ありげに笑っている。なるほど。120年前、アメリカは当時人件費の安かった日本に自国の土産物を外注していたのである。当時の日本製品の国際評価は廉価・低品質であり、価格の安さを武器に世界に販路を広げた。はるばる行ったニューヨークでそれと知らずにメイドインジャパンの土産物を買って帰った日本人もいたことだろう。このカップはエストニア人が買ったのだろうか。120年がかりの世界一周の旅から、様変わりした日本に里帰りさせてやることにしよう。

もう1杯ウオッカを飲もうというので、やむなく受けて立った。こんどはグラスになみなみと注いだ。乾杯して親父から0.5秒遅れで飲み干した。帰り際にその日の丸の旗は大事にしてくれという、胸に軽く手をあててもちろん「I promise」と答えた。一旗の旗のために700年間独立を失った民族である。エストニア人が国家や国旗に対して抱く思いは重い。考えているうちに酔いが回り、あわやヘルシンキ行き船に乗り遅れるところであった。出航は午後9時。北欧の夏の太陽は水平線をかすめるように高度を下げ、夜10時前、漸く北の海に没した。

終わりに一台北（台湾）

台北には必ず立ち寄る骨董屋がある。店舗はビルの1階と地下1階にあり、地下の鍵のかかる小部屋には博物館級の逸

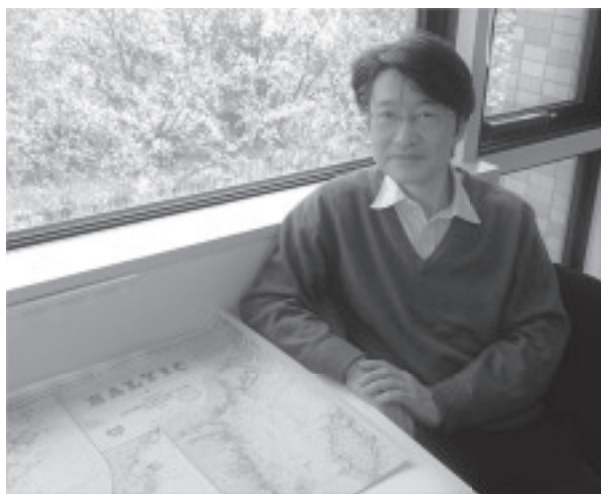
品が（もちろん高すぎて買えはしないが）並んでいる。その日も地下に降りていくと、珍しく主人がおり、奥さんや品のいいヤングミセス6～7人と一緒にテーブルを囲んでいた。私立小学校のママ友とのワインの試飲パーティだという。ご主人はアメリカ人で、初対面である。よかつたら一緒に、と言われ、一旦は遠慮したが、重ねて誘われたので加わらせてもらうことにした。どうも英語が得意な人ばかりではないようで、私か加わると喜ばれた。主人の話では、現在、ヨーロッパにある葡萄の木も多くは、実はヨーロッパ原産ではなく、ヨーロッパの葡萄が疫病で壊滅した後、アメリカから移したものだという。で、試飲しているのは東欧に残っていた貴重な原産木のワインなのだそうである。礼を言って辞去しようとする、今からシャンパンも開けるので、20分だけ待てという。

そもそも台湾人はあまり酒を飲まない。ミセスの一人が「男の人は強い酒が好きなのにどうして弱いシャンパンなども飲むのか」と聞くので（ちょっと不思議な質問だった）、女性と一緒にの時は連れに合わせ、シャンパンやカクテルを飲み、忘れたことがあるときは一人で強い酒を飲むのです、と答えておいた。奥さんが中国語に訳してくれ（奥さんは台湾人である）、それなりにウケたようだった。骨董屋で酒をふるまわれる機会が度々あるのは不

思議な幸運だが、骨董はたとえ正札がついていても価格交渉が必ずあるので、どんな国であろうが店の人と話をしないわけにはいかないのである。

旅に出ると、できるだけ現地の骨董屋

(アンティークショップ)に立ち寄るようにしている。店の人や居合わせた見知らぬ客との会話で、思いがけずその土地の歴史が立ち現れる。そこでそれを具象する小物の一つ連れて帰る。たとえ家族の評価が低くとも、悪くない趣味ではあるまいか。↩



よこさわ こういち

1984年 北海道大学理学部卒業卒寮

北海道大学大学院理学研究科修士課程を経て(株)日立製作所に入社
在職中に北海道大学大学院工学研究科博士課程に社会人入学

2007年 北海道大学医学部保健学科教授

翌年 北海道大学大学院保健科学研究院教授(現職)

テーブルにあるのはヘルシンキの古書店で入手したバルト海の家図(1893年ロンドン刊、94年改訂)。10年後、ロシアのバルチック艦隊がこの海域を通過し、日本に向かった。エストニアもフィンランドも当時はロシア領で、東バルト海はロシアの内海であった。

我が家のワイドテレビジョン

田村 浩志

我が家の居間の南側に四枚のガラス戸のサッシがあり、窓辺にいと外の風景がよく見える。私はこの広い窓枠をワイドテレビジョン（ワイテレ）と密かに呼んでいる。窓辺にソファを置き、いつも横の小棚には読みかけの本と双眼鏡を置いている。ここは私のお気に入りの場所で、一日の多くの時間を費やしている。四季折々の風景の移ろいを眺めて、いろいろと思索することが多い。庭や周辺のさまざまな樹種が毎年々々、季節の躍動を奏でられる。日が照り、雲が流れ、風がそよぎ、雨が降り、雪が舞い降りる。晩秋には紅葉も風に吹かれてひらひらと惜別を告げる。四季の変遷は壮大なシンフォニーのようでもある。

我が家のワイテレのもう一つの主役はトリたちである。庭の木々の枝や梢に飛来する野鳥を双眼鏡で確認して図鑑に記録してきたところ、今までに58種を数えている。アトリやホオジロ、スズメなどが群れで訪れると鳴き声のハーモニーが一段と高くなる。キクイタダキやゴジュウカラ、ベニヒワなど珍しい種もやって来る。小鳥たちが梢から枝へと気ぜわしく飛び移る様はみていて飽きない。目の前に25センチ四方の餌台を作り、屑米を入れておくとスズメの群れがやってきて啄み、近くの松の枝との間で頻りに位置交代をする。一度に六・七羽ずつ「選手交代」するので結構動きが激しい。もう一つ声高に鳴くのが昆虫のセミたちである。ツクツクポーシと騒ぎ立てるツクツクボウシやカナカナと哀愁を滲ませるヒグラシなど6種が季節を分けて鳴き繁ぐ。ときどき、ワイテレの画面をゆっくりと横切る哺乳類も大事なキャス

トである。タヌキやニホンザルは「視聴者」をチラリと意識しながら悠然と歩いて行く。冬の夜中に雪上にフットプリントを置いていくノウサギやホンドリギツネも入ると八・九種類がうごめいている。池のエゾアカガエルなども季節を鳴き分ける。

窓からの景色をテレビジョンと呼んだのは、私のオリジナルではない。もう10年ほど前に、妻がポーランドの翻訳家協会から招聘された際、私も用心棒として同行した。その折に、クラクフ市の郊外に古民家を手に入れた30年来の友人W夫妻に招待されて、その家に一晚厄介になったことがある。その時に両方とも生物学者の夫妻が真っ先に居間の外向きの広い窓をテレビジョン（ポーランド語ではテレゾール）と嬉しそうに示してくれたのが始まりで、50センチ四方形の大きな餌場に様々な種類の野鳥が群がって啄んでいた。その時の印象が強くて、我が家の窓もワイテレとなった次第である。2016年に会議に出席するため来日し、拙宅に立ち寄った夫妻は我が家のワイテレを見て大喜びしてくれた。

窓からの風景を一枚の絵として愛でるのも良いが、私は動画、即ちドキュメンタリーとしての動きのある風景が好きだ。木々の花を楽しむなら活発な春の植物たちの繁殖期が良いが、野鳥を楽しむなら新緑前の早春が良い。冬の間には落葉した木々の枝や梢は遮るものがなく、透けて見える。小鳥たちが梢で素早く移動する様子が見えるので、双眼鏡で観察すると、細かな種の特徴だけではなく表情までもがよく見える。例えば、モズが高い梢から地面をじっと見ているときに急に眼つきを鋭くして地面に急降下して何かを捕獲する。畑の周りの低い木々の枝先によくカナヘビやトカゲ、そしてオケラなどが突き刺さっているのを見ることがある。「モズのはやにえ」である。トビが空に円を描きながら次第に眼つきを地面の一点に固定し、円の直径を狭めて真下の地面に墜落するように降り、小動物を捕獲する。大抵はアカネズミな

どの野ネズミである。トビは自分より小型のハシボソガラスに追い立てられ、カラスは早春の田圃で自らより小型のケリに追われる。異種間の関わりも面白い。

無心に生き物の動きを見ていると、私も生きていることを実感する。残すところ長くはない私の生命、余計なことに気を取られずに大事にしなければならない、としみじみ思う。📧

編集者の添え書き 著者の田村浩志さんは一心会会員（1962年北海道大学理学部生物学科卒業卒寮）で、私の4年先輩にあたります。同期の高木信夫さんのご推薦により、田村さんの別のエッセイが2016年の本誌に掲載されていますが、今回はそれとは違ったルートで転載されましたので、蛇足ながら経緯を説明させていただきます。

田村さんは1979年から80年にかけて、ポーランド南部にあるクラクフの大学に文部省の在外研究員として滞在し、1980年に起こった労働組合「連帯」の運動に遭遇されました。この運動がきっかけとなって同国の共産党政が倒れ、新しい民主政府が樹立されまし



田村浩志さんと奥さんの和子さんの近影

た。この政変はやがてソ連邦崩壊を引き起こす原因の一つともなり、後に「連帯革命」と呼ばれるようになりました。この革命は平和的に行われましたが、社会は混乱し、人々は生家苦にあえぎました。ポーランドでのこの経験を契機にポーランド語の翻訳家になられた、同じく北大学部生物学科を卒業した令夫人の和子さんは、のちに「北海道ポーランド文化協会」の会員となりました。

私は、偶然にも、同じ時期にポーランド中部にあるウッチ工科大学に客員教授として滞在していました。帰国後の1987年にこの協会の設立に関係しましたが、その会誌を通じて田村さん一家がポーランドで同じ時期に同じ経験をされたことを知り、エッセイのやりとりなどをさせていただきました。今回、地元の同人誌（ペンペン草の

会々報『ペンペン草 61号』(2017年) から転載を許可していただいた作品は、その中で私がとても気に入ったものの一つです。本誌にはこのような心温まるエッセイが必要ではないかと思い、「エッセイ広場」という欄を作ってお願ひしたところ、快く承諾して下さいました。

この文がきっかけになって、多くの方々が近況などを伝えるエッセイを本誌に投稿されることを期待するとともに、ご協力いただいた田村さんに心からお礼を申し上げます。

(『巖鷲寮誌』編集委員会 小笠原 正明)



ンの店に行くこと、提供されるまでに7時間ほどかかるパフェのお店に行くことの2点です。それ以外は今のところ思い浮かばないくらいいろんなお店に行ってきたので、連れてってくれた・ついてきてくれた友人に感謝したいです。

最後に、卒業式の袴を購入してしまったので卒業式が無事に開催されることと、卒業研究を終わらせ卒業式に無事参加できることを心から願ひまして終わらせていただきます。』



お知らせ

巖鷺寮一心会とは

本寮（巖鷺寮及び佐藤・新渡戸記念寮）の寮生・出身者ならびに関係者（役員・職員・その他）からなる親睦団体で、1936年に「一心会」として創設され、84年の歴史を持っています。これまで、改築や記念プレート設置などの節目のときに財政支援を行うとともに、定常的な情報交換の場をつくり、寮の運営を支援してきました。長いあいだ簡素な規約で運営してきましたが、**2019年11月23日の総会で規約の改正**を行い、卒業生のみならず関係者も会員とすることが出来るようになりました（付録参照）。来年度2021年度は、新規約のもとでの2年度目にあたります。

名簿の管理と運用について

2018年度まで全名簿を掲載してきましたが、個人情報保護の点で齟齬が生じる恐れがあることから、「**巖鷺寮一心会における個人情報の取扱について**」というガイドラインを設け、2019年度からは**2018年度寮誌掲載の名簿の改訂部分**のみを別紙で添付することにしました。ガイドラインの詳細は2019年度の本誌をご参照下さい。名簿そのものについては別冊にする、オンライン化する、など複数案がありますがそれぞれ一長一短があり、いまだ方向性が決まっていません。当面、事務局がデータベースを更新・管理し、問い合わせがあった場合は本人の承諾を得てお知らせするという方式で運営します。**住所変更等がありましたら、遅滞なくメール** (info@ganjuryo.jp) **で寮事務までお知らせ下さるようお願い申し上げます**

会誌『巖鷺寮誌』について

本誌は佐藤・新渡戸記念寮の寮生・寮出身者・関係者からなるコミュニティーと社会をつなぐミニコミ誌です。寮の創設から間もない1932年に寮生自身の手によって『五周年記念誌』として初めて刊行されました。その後しばらくは毎年『周年記念誌』として刊行されてきましたが、1942年から佐藤昌

介の揮毫による『巖鷲寮誌』を誌名とするようになりました。いまでも表紙に「周年記念」の記載があるのは、このようないきさつによるものです。

発刊以来ほぼ毎年刊行されていましたが、第二次世界大戦の末期とその直後、および1998年の改築直後には刊行されなかった年もあります。いまでは社会の各分野で活躍するOB・OBによるホットな話題から、寮生活を生き生きと伝える寮生近況まで、内容は多岐にわたっています。2020年度からは、寮誌の一部は寮のウェブサイトの「寮について」のページにおいてPDFファイルで閲覧できるようになりました。なお、本誌の発行は本会与一般財団法人巖鷲寮との共同事業ですので、出版費用の一部は法人が負担しています。

会費について

本会の活動は年額2000円の会費で賄われています。新規約により、本会員のうち特別会員を除く会員には、『巖鷲寮誌』と一緒に振込用紙をお送りして、以下の郵便振替口座に払い込むようお願いしています。

郵便振替 02740-1-19776 (加入者名：一心会 代表 小笠原正明)

銀行からの振込を含めて送金費用は振込人負担となりますが「ゆうちょダイレクト」によるオンライン振込を利用すれば費用がかかりません。会費の支払いにご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

2021年2月28日

巖鷲寮一心会

会長 小笠原 正明

(付録)

巖鷲寮一心会規約

- 第一条 本会は巖鷲寮一心会と称する。
- 第二条 本会の事務局を一般財団法人巖鷲寮内におく。
2. 各地に支部をおくことができる。
- 第三条 本会は会員相互の親睦を深め、寮の発展に寄与することを目的と

して必要行事を行う。

第四条 本会の会員は、巖鷲寮及び佐藤・新渡戸記念寮の寮生として在籍した者により組織する。

2. 次の構成員を、特別会員とする。
 - 一、佐藤・新渡戸記念寮の現寮生
 - 二、一般財団法人巖鷲寮役員
 - 三、その他関係者の有志

第五条 会員は、役員会の定めるところにより、会費を納めなければならない。ただし、前条第2項の特別会員については、この限りでない。

第六条 本会に次の役員をおく。

- 一、会長 一名
- 二、監事 若干名
- 三、幹事 若干名

第七条 会長及び監事は、総会において選出する。

2. 幹事は会長の指名するところによる。

第八条 会長は本会を代表し、会務を総括すると共に総会の議長となる。

2. 監事は会計を審査監督する。
3. 幹事には幹事長、事務担当幹事、会計担当幹事をおき庶務及び会計、行事を管掌する。

第九条 役員の任期は二年とする。但し再任を妨げない。

第十条 本会には総会、役員会、及び幹事会をおく。

2. 総会は毎年一回開催し、役員会及び幹事会の報告を受ける。
3. 役員会は必要に応じて会長が招集する。
4. 幹事会は随時開催する。
5. 議事は、出席会員の過半数を得なければならない。

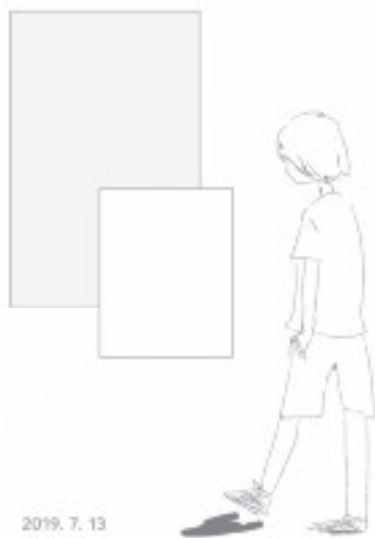
第十一条 毎年度の予算及び決算は役員会の議を経なければならない。

第十二条 規約の変更は総会において出席会員の三分の二以上の賛成によって行う。

付則1 この会則は2020年4月1日から施行する。

訃報

〈卒寮年〉	〈お名前〉	〈記事〉
1954年（昭和29年）	佐々木 博 様	2019年2月ご逝去 ご息様から連絡がありました。
1957年（昭和32年）	小野 健知 様	ご親族様から連絡がありました。



〈追悼〉

故佐々木博様は、本法人において1965年度から1976年度まで評議員、1977年度から2009年度まで理事、2010年度から2012年度まで顧問を務められ、寮の運営に貢献されました。

故小野健知様は、生前に多数の貴重な蔵書を本寮に寄贈されました。現在、寮の居間及び事務室に保管されています。

心からご冥福をお祈りします。

巖鷲寮一心会

編集後記

❖ この度巖鷲寮誌の編集の手伝いをさせて頂きましたが、予想以上にやる事が多く大変な面も多かった一方、今年では一冊の本が出来上がっていく過程に携われたことに達成感も感じています。校正や寮誌の諸々の調整のために、小笠原先生とDropboxやOneDriveを通じたやり取りを頻繁に行いましたが、そうしたものの操作に疎かった私にとって、共有機能を何とか使いこなせるようになったのも収穫といえるかもしれません。

さて、今年は皆さんも日ごろから感じていらっしゃるように、極めて異例な一年となりました。多くの集会や人が集まる行事、大学の授業といったものが延期、中止、縮小されました。だからこそ、こうした人と人の直接的なつながりが薄れるような状況が続いたときに、改めて寮の強みを感じることも多い一年となりました。「寮生のページ」の中でも、寮の生活を通してそうした人とのつながりを強く感じたという内容のことが多く見受けられるような気がします。こうした状況が早く収まることを願うと同時に、何年後、何十年後かにこの寮誌を見たときに、そうした時代もあったな、と思える寮誌になっているのではないのでしょうか。

最後に、巖鷲寮誌完成のためにご尽力いただいた皆様に感謝申し上げます。あ

りがとうございました。

(米田 啓祐)

❖ 今年から編集委員を務めることになりました塚本博隆です。よろしく申し上げます。1995年に卒業しました。寮生時代にも寮誌の編集を担当しました。今読み返すと汗顔ものの内容でしたが、編集の仕事に楽しさを感じたことも懐かしく思い返しています。現在は北海道新聞で編集の仕事に携わっており、不思議な縁を感じています。現在の寮誌は、若い寮生やいろいろな分野で活躍しているOBがそれぞれ興味深い原稿を寄せてくれていて、面白さを感じています。デジタル中心の時代を迎えており、寮誌のカタチは変わっていくのかもしれませんが、寮の出身者のつながりを保つ場としての寮誌の作成に少しでも力になっていければ、と考えています。

(塚本 博隆)

❖ 昨年はコロナで明け、コロナで終わった年でした。日常が「日常」でなくなる「異常」。この様な状況でしたので、例年10月頃に開催していた東京一心会は中止にしました。一年に一度顔を会わせ、世代をまたいでの寮生活を思い出しながらの懇談の場。今思いますと非常に貴重な集まりだったと感じているところです。今年は是非開催できる様な環境になって

いる事を願うだけです。元気な顔ぶれを
次回の寮誌に報告出来るように。

コロナ禍でも世界に目をやれば、台湾
での対策が他国に比べて非常に優等生の
様子。そのベースは明治 29 年台湾総監府
衛生顧問（その後民生長官）に就任した
後藤新平（医師・現岩手県水沢市出身）
に遡ると思います。当時台湾は伝染病が
多いことで知られており、上下水道の整
備をはじめ衛生設備の充実を徹底して図
ったようです。この台湾には 5 歳年下の
新渡戸稲造が後藤新平と出会った後、明
治 34 年に台湾総監府の技師となります。
同じ郷里ということが二人を何らかの形
で結び付けたのかもしれませんが。

現在のこの状況下、寮での生活がどこ
でどう繋がるか、長い目で見て人との出
会いの絆を大切にしたいものです。逆に
この環境を如何にポジティブに生かすか
発想の転換が必要なのかも。

（鈴木 文明）

❖ 編集委員でありながらたいした手助
けも出来ず、恐れ入っております。特別
寄稿の表題を見ると、なんとバラエティ
に富んでいる事でしょう。これが学部や
学科の同窓会誌と違うところで、進路の
違う学生が同じ屋根の下で暮らした寮生
生活のいいところだと思います。現役には
多様性にあふれた寮生活の今を楽しんで
ほしいのです。

2020年3月近郊の山を下山中に転倒し、
左膝の後十字靭帯と内側内副靭帯を断裂
しました。八甲田で山スキーをやるまで
巖驚寮誌 2020年度

回復したのですが、登りは相当きつくな
りました。また 2021 年 2 月に不整脈が
起こり救急車のお世話になりました。だ
んだんガタが来ています。

（大久保 勉）

❖ 昨年のいまごろ、この編集後記で「こ
のあと（北海道の新型コロナの）新規陽性
者数が一桁台で推移すれば先が見えてき
ます」と書きました。昨年 10 月まではほぼ
その通りに経過しましたが、11 月から予
想を超える大感染となり、このウィルス
の難しさを思い知らされました。いま一
段落していますが、この先の予測は簡単
ではありません。道庁の長山さんに
COVID-19 のクロニクル（記録）の記事を
お願いしました。最後の最後まで修正の
必要があるとのことで、苦勞しておられ
ます。

そんな中でも本誌 2020 年度版の編集
が順調に進んだのは、この寮とそれを支
える一心会の底力を示すものです。ご協
力いただいた皆様に感謝申し上げます。
特に寮生担当者はがんばりました。今年
の寮生はみんなしっかりしています。困
難は若者を鍛えるといいますが、本当に
そうだと思います。そのせいか、来年度
の入寮希望者が殺到して対応に大忙しの
ようですが。

以下、編集者の立場から 2 点ほどお伝
えます。

一心会名簿を寮誌から切り離したのは、
本誌にとって大きな決断でした。その結
果、広報誌として活用できるようになり、

寮のウェブサイトへの掲載も可能になりました。ただ、切り離れた名簿をどうするかまだ決まっていません。来年あたり別冊で刊行することも考えていましたが、個人情報の不掲載を希望する人が増えてせっかく刊行しても空白だらけの名簿になる恐れがあります。データベースそのものは事務局により適切に管理されますので、情報が必要な方はどうかご遠慮無くお問い合わせ下さい。(77頁の「一心会」のページ参照)これが1点目です。

2点目は、今度の号から「エッセイ広場」というカテゴリーを設けたことです。その第1号として田村浩志さんの珠玉の一篇を、特にお願ひして掲載させていた

だきました。「添え書き」にも書きました。田村さんは私にとっては大先輩で、不思議ないきさつからこのエッセイの掲載をお願いすることになりました。「特別寄稿」は、どちらかと言えばまとまった力作が多いのですが、このエッセイのように、読んでほのぼのとした気分になる文章の存在も貴重です。それと対照的に、寸鉄が一閃するような切れ味のよい文章も面白いかも知れません。新しいカテゴリーとして積極的にご活用ください。皆様からのご投稿をお待ちしています。

COVID-19 ももう少しの辛抱です。どうかご自愛を！

(小笠原 正明)

巖鷲寮誌 2020年度

2021年3月31日発行

編集委員：米田 啓祐、塚本 博隆、鈴木 文明、大久保 勉、○小笠原 正明
(○印：編集長)

発行所：一般財団法人巖鷲寮

発行人：一般財団法人巖鷲寮・巖鷲寮一心会

〒060-0007 札幌市中央区北7条西18丁目 佐藤・新渡戸記念寮内

郵便振替 02740-1-19776 (加入者名：一心会 代表 小笠原 正明)

印刷所：楸アイワード

© M. Ogasawara, 2021



一般財団法人巖鷲寮

〒060-0007 札幌市中央区北7条西18丁目4-23

ホームページ：<http://www.ganjuryo.jp/>

メールアドレス：info@ganjuryo.jp